

人物を中心とした

三重県教育郷土史

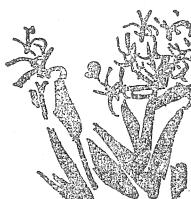
三重県教育委員会
広報統計係

◎明治以前

藩校

本県における公立としての学校は、文政二年（一八一九）に創設された津藩の藩校有造館が始めといわれている。それ以前にも小規模なものがあったが、公に制度としてつくられたのは有造館であるといつてもよいのではなかろうか。

有造館は、藤堂藩第十代の藩主藤堂高児の命を受け、碩学津坂東陽（孝禪）の建議により創建され、翌文政三年開講されたものである。



県花　ほほゆう

有造館には十五歳以上の藩士の子弟が入学を許された。このほか養正寮では、九歳以上の童子に句読、書法のほか礼節、算術などを教えた。のち、さらに二十八区の教場が増設され、整眼堂（兵学寮）、演武莊等も増設された。また、仁濟堂という医学寮や輶騎亭という馬術の練習場も設けられ、嘉永六年（一八五三）になると鶴海流の水練も教えるようになった。

有造館の督學には、東陽のほか石川之堅（竹屋）、齊藤正謙（拙堂）、川村尚頼（竹坡）、土井有愬（豊牙）ら歸々たる学者が任命され、また、猪飼彦博（敬所）のような碩学も迎えられた。この有造館から公刊された書物は数多く、「養治通鑑」を初め「孝經」や「論語」など数十種におよび、地方の文教に貢献するところとなるものがあった。

当時幕府は、一藩一校の原則でのぞんでいたが、藤堂藩では伊賀の上野に津藩校の分校ともいふべき崇伝堂が文政四年（一八二

一）建てられ、文場あるいは講堂と呼ばれた。これも文教政策に熱心な藤堂高児の創設になるものである。

その他現在の三重県に含まれる当時の各藩には藩校として次のものが創設されていた。（津藩）名張学校、訓蒙寮（桑名藩）松平定綱が立教館を、（長島藩）藩主増山正賢（雪賀）が学者十時梅屋を招いて文礼館を、（龜山藩）石川憲之が明倫舎を、（神戸藩）藩祖本多忠統（翁蘭）が教倫堂を建て長野豊山、川村竹軒らが有名である。（菰野藩）石高わづかに一万石の小藩であるが、藩主土方義苗は藩の財政が窮屈していたにもかかわらず大いに文教に心掛け、藩邸内に鷹沢書院を興し、のち稽文館から頭道館と改められた。（鳥羽藩）文政年間、藩主稻垣長剛が尚志館を、（忍藩）興譲堂を、また、紀州藩領であった度会郡田丸（現在の玉城町）には田丸学校があり、紀州領松阪には時習館があった。さらに山田奉行所のあった度会郡御園村小林には、弘化四年（一八四七）に山田奉行所が設けられた度会郡御園村といい、のち温故堂と改称した。

文庫

つぎに三重県において学問の研究に貢献した機関としての文庫について紹介する。

豊岡崎又庫がそれである。外宮の権利宣出日延佳以下七十名の寄付した金で、慶安四年（一六四八）に山田岡本町（伊勢市）に創設された。この文庫は図書館兼学校として全国にその名を知られ、公卿、大名、学者等は参宮ののちこの文庫に珍書奇籍を寄贈したものである。また、ことを訪れた碩学は、この文庫で講義をしたので、地方文化に貢献するところをわめて大きく、外宮の神

官等のあいだに研学の氣風が盛んになり、山田奉行八木但馬守は、二十石を寄贈して永代の修繕料に当てたほどである。

山田に豊岡崎文庫が設けられると、この影響はたらまち宇治（内宮）に及び、内宮方の宇治会合年寄らの尽力で、内宮神官の子弟らの修学のため、貞享三年（一六八六）今在家町丸山に、山田奉行岡部駿河守の尽力を得て、文庫が建てられた。初め内宮文庫とよんだが、元禄三年（一六九〇）には閑静な淨地、林崎の地に移され林崎文庫とよばれ、柴野栗山の「林崎文庫記」や本居宣長の「林崎ふみくらの詞」はともに有名である。明治になって両文庫は合併されて神宮文庫となり今日に至っている。

つづいて、明治以前に本県で盛んであった学問と、学者を紹介する。

心学

庶民教育としての心学は、家業に追われて暇のない百姓、町人たちに、やさしい言葉で身近なたとえ話を暮らし話をしながら、いつとはなしに、神、儒、仏三道の精神を植えつけてゆく道話を行なった。これは、県下の天領および各藩の領民教化政策に合致したため、その保護を受けてめざましい勢いで普及した。

伊勢、伊賀地方の心学の浸透は、心学興隆時代ともいふべき寛政年間から始まつたようで、京都の明倫舎を主宰した宇島神院や上河浜水らがますやつて来て、教化活動を始めた。寛政年間には、津城下京口町の村長兵衛らの発起によつて、講舎の勧善舎を設立し、藩主高嶽の援助を受けて講話会を開いたり、京都の心

学の一大潮流を代表する渕水や中沢道二さらに美濃心学の大家久世友輔や、近江心学の指導者立川肥遜らが、続々と領下町村において巡回講演をし、津藩はいうまでもなく、義名藩、神戸藩などの教育にも貢献するところがすこぶる大きかった。地元の学者では津藩士の林順平が中央に認められ、京都の心学教化活動の総本山ともいいうべき、修正、時習、明倫の三舎から発行した心学の講師免許状で三舎印鑑の所有者となり、江戸表において道話を行なう資格をも与えられたほどの公認学者となつた。

漢学

江戸時代において、県下の学芸は、全般にわたってすこぶる活況を呈した。

まず漢学をあげると、津藩は、藩祖高虎以来学問に対し熱心であつたが、この時代に入ると朱子学がその中心となつた。藩校有造館開設以後は、津坂東陽がもっとも有名であり、藩の学風を統一し、その著書「韋伯錄」は藩祖高虎の事績を中心としたもので、津藩の聖典ともいいうべきものである。

また、有造館の督学齊藤拙堂は、津藩文学の黄金時代を築いた学者で、その著書「月瀬記勝」は、大和の國「月が瀬」の梅花を全国に紹介して、これを天下の名勝地たらしめた名文である。また、その著「伊勢国司記略」は伊勢の国司北畠氏の興亡史として有名である。

民間の学者としては、一身田の細谷半齊、松坂の家臣松崎らがあり、志摩の的矢の北条讀亭(譲)は菅原山麻屋の塾頭となり、また彼の親友である山田の東夢亭とともに、その師山口四菴が主

本居宣長

宣長の神道説は、三十五年の歳月を費やし、六十九歳にして完成した「古事記伝」四十八巻におさめられ、その金版本は今日もなお松阪市の記念館に保存されている。天明六年(一七八六)から出版にかかり文政五年(一八二二)に全部が刊行され、この出版は、宣長の学問の体系確立に重要な意義をもつものであり、「日本書紀」を排し、「古事記」を重大視している。この「古事記」観の要約されたものが「直隠靈」(なまののひなま)で、その考え方を歌に詠んだものが「玉鉢百首」である。

宣長の神道説は、神道をもつてわが国家の成立の根源であると

し、この神道は、ただ神を祭るための狭い道ではなく、広く政治、道徳をはじめあらゆる事物の大本であるとして、社会、人生のすべての現象もこの神の考えによるもので、人間は深く誠心を

もつて神を祭るべきであり、古代の神話研究には後世の思想や主觀を加えず、外来思想と共に儒教を排斥し、古代人の心の表現としてありのままにこの事実を信じ、その心を知るべきであると主張して復古思想を唱え、古典研究に志した。

宣長は神道学のほかに国史・国語・国文学などをきわめ「古事記」のほかに「祝詞・宣命」、「源氏物語」、「万葉集」、「古今集」などの研究を完成した。彼の隨筆「玉勝間」は、研究の余録として最も洗練されたもので、古典の研究を志すものにとって必読の書とされている。

宣長の晩年は名実ともに国学界の中心となり、四十余国の人々が加えず、外國の土農工商の門人は六百名にものぼったといわれている。その居宅は松阪の魚町にあつたが現在は松坂城趾に移され、その居室の四隅に鉢をさげた書斎「鈴の屋」は国学の道場として全國に知れわたっている。宣長が還暦の年に、自画像の上に記した和歌「敷島の大和心を人間はば朝日にほう山桜花」はあまりにも有名で、その思想を端的に表わしたものである。

後期の学者には数多い中にも、荒木田久老(五十歳)と谷川士清が有名である。荒木田久老は古典の研究を志し、晩年宣長と対立して独創的見識を持つ学者である。

さらに女流学者としては山田の人慶徳麗女があり、その著「池の藻屑」「月のゆくゑ」などは歴史小説の発端といわれ、また、内宮の御宣中川経雅は「大神宮儀式解」を著わして、延暦の「皇大神宮儀式帳」の注釈を行ない、同じく蘆田守良は「神宮典略」を著わして神宮の故式典礼について研究した。

鎌倉時代に、すでに成立した伊勢神道(度会神道)の主唱者度会忠おおよび家行の流れを汲んだ出口延佳は、この時代の初めに出て伊勢神道を受けついだ学者である。その神道説は儒家神道に属するもので、その著「陽復記」によると、在来の仏教、道教などの理を除いてもっぱら儒教、ことに易の理を説き、神道は神事だけでなく、人間の万事がすべてこれに基づくものであると主張されている。

この説は、山崎闇齊の垂加神道にも影響を与えた。延佳の子の延經も神道学者として知られている。

中期になり、道・儒・仏三教などから離れて、国学の立場から純粹神道を求めるとする復古神道が打ち立てられた。荷田春満により源を発した古典の研究が、賀茂真淵を経てその門下本居宣長により受け継がれたのである。

宣長は松坂の商人小津三四右衛門定利の長男に生まれ、宝暦二年(一七五二)本居と改め、初めは栄貞と名乗った。宣長は小兒科医として生計を立てるかたわら、学問の研究を深め、春満、真淵および門下の平田篤胤とともに国学の四大人と称せられ、古典の解説による古神道の系統的研究をなし、国学の基礎を作った人物で、俳人芭蕉とともにその名は全国に及んだ。

谷川士清は津市八丁の医者で、家業のかたわら、垂加神道、和歌、国史、国語などの学問をきわめ、宣長とも親交があり、多く門人に神道を教え、野にあって終生仕官をせず、垂加流の神道家玉木著者に学んだ篤学の歎神家として有名である。その著書として「日本書紀通訳」三十五卷は、宝曆元年（一七五一）に完成し、宣長の「古事記伝」とともに不朽の名著である。また、国語辞典として「和訓栞」があり国語研究上日本最古のもので、国語学史上特筆すべきものとされていく。

宣長の説に反対した学者に、朝明郡小向村（朝日町）の橋守部がある。彼は生薬園、椎木などと号し、谷川士清の門人であったが、主として独学で国学を修め、晩年江戸に出て伴信友、平田篤胤、香川景樹らとともに、天保の四大人として名をなした。守部は宣長の学説に對してあくまでも対抗し「古事記」より「日本書紀」の方を重んじ、從来の国学者の主張する極端な排外

思想に反対して、外國の思想でも長所は学び、その上で日本の優秀性を發揮すべきことを強調した。これらの学説と主張は「難古事記伝」「稟威言別」「稟威道別」「神代直語」などに述べられ、また、隨筆、国語辞典などの著書の数は六十余にも及んでおり、文化・文政時代以後のわが古典学界に刺激を与えるところが多かった。

俳諧

近世以前に出て伊勢俳諧を創始した人に、内宮の宮司荒木田守武（文明五年一一四七三一生）があるが、松尾芭蕉の出現によって俳諧は完成の域に達したのである。

芭蕉は伊賀の生まれで、初め薬草家に仕えたが二十三歳の年に出家し、京都へ出て北村季吟の門に入った。やがて郷里に帰り句集「貞おほひ」を著わし、さらに江戸に出て俳諧生活に入り、この時代に談林の影響を受けたのである。

彼は次韻時代に入り、徳のすぐれた人格詩人となり、俳諧を革新して、「わら」「さび」「しおり」の蕉風を完成し、「枯枝に鶴のとまりけり秋の暮」といって閑寂の境地に入り、日本文学を代表する一大偉峰となつた。三重県においては國学者本居宣長とともに最も偉大な存在である。

芭蕉の著書「冬の日」「春の日」「臘月」「ひきん」「猿蓑」「炭俵」「続猿蓑」の俳諧集を世に「七部集」と称し、芭蕉の閑寂味は猿蓑においてその極点に達したのである。また、「奥の細道」「幻住庵記」のことは、紀行文として非常にすぐれたものである。元禄七年（一六九四）大阪において「旅に病んで夢は枯野を

かけめぐる」の句を残して歿した。享年五十一歳。

当時、三重県の文学は非常に多彩であった。和歌、俳諧のほか戯曲、小説等も盛んであり、戯曲で三重県を取り扱つた有名なものとしては、伊賀の仇討（荒木又右衛門鍵屋の辻三十六人斬り）を扱つた、近松半二の淨瑠璃「伊賀越道中双六」や奈河龟助の歌舞伎「伊賀越業掛合羽」がある。また、小説には、山田に生まれのち京都において医師となつた山岡元隣の明暦二年（一六五六）の作になる「他我身の上」および「小廻」があり、ともに教訓主義勃興時代の先駆的作品で、教訓的な短編集である。

その他、西鶴や山東京伝、式亭三馬等が三重県（伊勢）を題材として取り扱つた作品は数多く出版されている。

江戸時代は、京都と江戸の中間に位置した三重県にとって、ま

ことに百花りょう乱の時代であったと言つても過言ではない。

◎明治時代

明治五年に発布した学制によつて、本県は第二大学区（愛知県を本部とする）に属し、県内（伊勢、伊賀）を四中学区（第三十五～三十八）に、明治六年に七十四小学校区に分け、ついで六百八小学校区となり、明治八年の学区改正を経て明治九年には公立小学校二百五十一校を数えた。その当時の小学校は、現在の小学校のように独立した校舎、校庭をもつたものではなく、寺、会所その他の公共建築物を転用したものであり、また、就学年齢も現在のように規定されておらず、一応小学校の四年間を義務教育としたものの、厳しい義務制ではなく、これが確立したのは明治三十三年の小学校令改正以後である。

師範学校

当時県下の小学校教員は、非常に有資格者が少なく、「よみ」「かぎ」「そろばん」のよくできる者を採用していた。また、県下には教員養成機関としての師範学校がなく、志望者を愛知師範に入れていたが、明治八年七月県内に師範学校と附属小学校設立および訓導の等級・月俸と教員心得を定め、七月公立師範有造学校を第三十七番中学校区の安濃津丸（津市）に設置し、東京師範卒業の三重県士族阿保友一郎が校務を執り、最初は生徒二十名を募集した。

一方度会県では、管下の第一大学区を第三十九中学区（度会、多気、飯野）、二百三小学区、第四十一中学区（答志、英虞、牟

（婁半郡）百三十九小学区に分けたが、實際には開校していないものが多かった。

度会県ではまた、明治六年十二月山田下馬所讀の旧師範山田大路篤忠の邸を借り、教員假講習所を開設した。これが度会県師範学校の前身である。明治七年四月、校舎を宮崎文庫内に移し、八月文部省へ伺い済みのうえ度会県師範学校と改称、宮崎小学校を附屬小学校とした。同年九月さらに岡本町旧師範上部貢亭の邸に移り八年冬校舎の新築を見た。翌九年四月度会県が廢止されて三重県に合併されたので、本校も三重県山田師範学校と改称した。その後同年十二月十九日付近農民の暴動（伊勢暴動）のため校舎が焼失し、生徒を津市三重県師範学校に転学させ、本校は閉鎖された。

中学校

当時の三重県での文教陸盛地として、津は県庁の所在地でもあり、旧藤原藩の城下町でもあることから当然文教施設も多かったが、実際は宇治山田（伊勢市）に私立学校の設立が盛んなことは、度会県令の橋本寒栗の手腕によるとともに、神宮を中心とした神都が学問の府であり、江戸時代以前より京都からの学者の往来も多かったということも原因といえるであろう。

明治五年学制発布から六年五月に至り、既存の郷学校を小学校と中学部に区分、その中学部を宮崎語学校と改称し、英語をもつて通訳および専門の諸科に進もうとする者の教育を行なった。生徒の学業が進歩するにつれ、外國教師招へいの要望が強くなり、七年十一月イギリス人フレデリック・サンデマンを一年間招き

指導を受けたが、任期満了後八年十一月廢校となつたのである。この生徒の中から、尾崎行雄、的場中、大井万太郎、植山徳藏らが出ていた。

学制に基づく中学は、各県で官許を得て隨意に設立することができ、津公立中学校が設立され、新三重県誕生後最初の県会で、津公立中学校を県立津中学校に昇格する決議がなされた。この県立津中学校はその後、三重県尋常中学校（二十年三月）三重県第一尋常中学校（三十二年三月）三重県第一中学校（三十二年四月）三重県立第一中学校（三十四年五月）三重県立津中学校（大正八年）などの名跡の変遷を経て、現在の県立津高等学校となつたのである。

度会県では明治十二年の県会で津に第一中学校ができたのに刺激され、山田中学校の設立を明治十四年度の通常県会に提出した。

しかし、このときは経費節約のため否決となつたが十五年十月に宇治山田公立中学校を設置して、以前からあった暢發学校を付属としたのである。その後中学校は生徒がふえ十八年七月度会郡立とされたが、一方暢發学校は生徒数が減少したので、十八年十月廢止となつた。しかし、十九年中学校令が出て、これに準拠しないということで三重県知事から廢止を命じられ、せっかく設立した中学校も廢校となり、生徒はやむをえず郡立の高等小学校へ吸収されたのである。

神宮皇學館

王政復古を完成した明治政府は、神道の宣傳のため全国に宣教師を置き、神宮教院をつくりたが、特に伊勢神宮の膝元で、神官

の子弟に皇學と神道を研修させるため、明治六年一月、神宮教院のなかに神宮教院本教館を置いた（宇治の藤波邸）。科を下等、中等、上等に分け十学級からなり、古典を中心として講義を行ない、生徒は寮に入つて質実剛健な生活を営んでいたが、寮内に仙台、熊本西闇がてきて波乱をまき起こし、ついに十四年十二月九日館は閉鎖された。これが皇學館の母体である。

神宮ではこれに代わるべき皇學研修の学校をつくるべく十五年七月六日神宮祭主久邇宮朝彦親王の令旨を体して、神宮権宜室藤岡好古から内務卿山田顯義宛に、「宇治の今在家町の林崎文庫は神官司庁の所屬にかかるもので、今般その講堂に皇學館を開設し、神宮神官の子弟を養成したく、経費は神宮の社入金でまかなうにつき設置を許可されたい」と伺い、翌十六年五月内務省の認可を受けた。

十六年四月初代館長に神宮少官司中田正朔を迎えて開館式を行

なつたが、授業が開始されたのは十八年一月からであった。その後三十二年県立第四中学校ができたので中学校程度の予科を廃止し、大正七年に浜郷村神田久志本（現在伊勢市立倉田山中学校となつている）に移転した。

明治から大正にかけて本県小学校教育に功労のあつた人に川村寛氏がある。

氏は旧姓を鷹森と称し幼名を萬三郎といい、少年時代に川村尚祐に養子となつた。明治三年十九歳のときすでに津藩校養正寮の句読師に任命され、廢藩後、明治六年小学校少助教となり、安濃郡養正学校勤務となる。のち、その校長となり明治四十二年三月退職するまでの三十七年間、努力勤勉時代の推移に即した学校運営に努力し、氏の徳望は県下に広まり、氏の教化は広く本県小学校教育の模範となつたのである。

氏は温厚な中にも教育への情熱を持ち、しばしば他方面から勧誘にもかかわらず、そのすべてを断わり教育を一生の事業として尽くされた。私立幼稚園、私立養正学舎等を創立し、このほか本県における教育に關して氏の教化が及ばないところはないといわれた。

明治三十八年帝国教育会は氏の多年にわたる小学校教育の功績を表彰し、三十九年には、文部大臣から同様の賞を受けた。また、明治四十三年皇太子殿下が三重県行幸の際には、教育功績者として特に賞せられ、昭和三年には名誉ある藍綬褒賞を受けていた。嘉永元年五月生まれ、昭和十一年歿、享年八十四歳であった。

◎大正時代

大正時代は県下の教育制度が全般にわたり普及した時代である。大正元年における県下の市町村立小学校の数は、尋常小学校百五十八校、尋常高等小学校二百七十五校、高等小学校が五校あり、この数は明治後期と大差がないが、尋常小学校から尋常高等小学校に変更されるものが多く、大正十五年には尋常小学校五十校、尋常高等小学校三百八十四校、高等小学校一となり、このうち尋常小学校から尋常高等小学校になったものが元年にくらべ百校もある。

大正時代には高等科教育が普及し、尋常小学校卒業者の七割が高等科に進学している。また、就学率は明治時代からの義務教育趣旨徹底と市町村の督励によって非常に向上し、大正の初めには九九・四パーセント、大正末では九九・五パーセントの就学率を示したのである。

県が教員の講習会を開催したり、師範学校を通じて教員の資質向上をはかるための施策が活発になったのは大正十年ごろからである。これによって、指導監督の面においても、明治時代より一段と充実したのもこの時代の特色といえよう。さらに、県は市町村立または私立の経営で不振であった実業補習教育を振興するため、大正十三年三月、当時の田子知事は、文部省の実業補習学校規程改正と内容の整備充実の方針に従い、実業補習学校設置要項を定めた。こうして公立実業補習学校は大正末にいたりほとんどの市町村に設けられ、それぞれの地域に応じ

されている。

また、大正時代のスポーツの普及はあまり振わなかつたが、野球は比較的早く流行し、中学校の県下野球大会が毎年三重高農で行なわれ、大正四年には山田中学校が鳴尾の全国中学校野球大会に出場している。

◎昭和前期

昭和前期における三重県の教育は、全国の各県と同じく皇国主義が浸透し、教育指導の面に県の努力が傾注されるようになり、高専科の設置が普及して、尋常小学校だけで終了する者が非常に少なく、就学率は一〇〇パーセントに近い高率を示した。

三重医專

医学校としては、明治九年津市に三重医学校が設立され、明治十九年三月經營難のため廃校となるまで、多くの医師を教育した。当時すでに県立病院は設置されており、明治三十三年四月に津市に移管、津市立病院として昭和十九年三月までの六十年間、治療研究にあたってきた。

太平洋戦争が始まると、国は多數の医師養成の必要から、各府県に県立医專設置の方針を打ち出した。当時津市立病院院長の渡辺篤氏が、当時の曾我知事に医專を津市に設置するよう進言、昭和十八年五月の県会で賛成、同年十二月三重県医学専門学校として文部大臣の認可を受けた。県は仮校舎を津市大谷町の市立勵精商業学校に置き、津市立病院を附属病院として県に移管を受け、京都帝国大学名譽教授石川日出鶴丸博士を学長に、渡辺篤氏を附属

て農業、水産、商業、林業を主とした授業を行なつた。

幼稚園についても明治に引きつづき、市や町において公立、私立（多くは仮教関係）の幼稚園が増設され、大正十五年には、公立七（四日市三、桑名一、松阪一、鳥羽一、尾鷲一）と私立十四校（津五、宇治山田（伊勢市）五、白子、神戸、上野、久居各一）を数え、園児數千三百名、保母五十余名となつたのである。

三重県高等農林学校

このように大正時代は第一次世界大戦後、形式的には非常に充実したが、産業界の不況が影響して、中学校への志望者の増減も激しく、校舎、設備などの改善はあまり見るべきものがなかつた。その中で政府の教員水準向上方針に従い、文部省の決定になつた高等農林学校設置を大正八年七月の臨時県会において決定した。

当時設置を予定された津市と栗東村は、低温の砂地で所々に松林があり全くの荒蕪地であった。大正八年十二月、二千六百七坪の官有地と、民間から六万三千一百五十六坪を購入して校地とし、大正十年十二月十日官立三重高等農林学校が誕生し、文部事務官兼高等師範学校教授上原繼美が校長に就任した。

大正十一年四月から開校、農学科、農業土木科、林学科の三科を置き、とくに農業土木科は最も特色ある学科で、全国高農のうち最初のものであった。

図書館・スポーツ

県下における図書館は、大正末に公立二十六、私立三十四計六十が設立されたが、そのうち大正時代になってから四十八が増設

病院長として、昭和十九年四月開校したのである。

昭和二十年七月二十四日と二十八日の二度の爆撃によって、本館を除くほとんどの附属病院施設が全焼したが、このなかから終戦後に初めての卒業生を出したのである。その後昭和二十三年一月十一日旧制三重県立医科大学に昇格し、現在の三重県立大学医学部として多くの医師を卒業させている。

神宮皇學館大学

明治十五年に創立された神宮皇學館はその後種々の改革を経て、大正十五年二月の規則改正で卒業生に中等教員の免許が与えられることになり、多くの教員が誕生していく。

昭和十三年三月の帝国議会において、神都（伊勢市）に大学を設置することが採択され、昭和十五年四月から神宮皇學館大学が誕生し、それまで内務省の管轄であったのが、文部省に移った。越えて十六年四月には附属専門学校が開設され、学部（三年）、予科（三年）、専門部（三年）からなる文化系の官立大学が実現し、東北大學から山田幸雄博士が初代学長となつたのである。しかし、この皇學館大学も、終戦後占領軍の命令により名古屋大学に事務を引き継ぎ、昭和二十一年三月にいたるまで廃校となつたが、昭和三十七年二月卒業生や神宮関係者の協力で運動と努力によって、再び新制の皇學館大学が設立されたのである。

師範学校の昇格

小学校教員養成機関としての、師範学校ならびに女子師範学校は、明治以来本県教育界に人材を送り出していたのであるが、小学校が国民学校と変わり、小学校教育が重視されるに至つたの

人物を中心とした

滋賀県教育郷土史



県花……シャクナゲ

井 上 砥

はじめに

「近江には、藤樹先生のほか精神的人物としては、遠くさかの
ばれば天台宗の開祖伝教大師あり、足利時代には梅尾の高僧良弁
僧正がある。なお明治の勤王運動の源泉をなしたというべき端獻
遺言の著者淺見絶賛があるかと思えば、開国の先鞭をつけてつい
に憂國の方に倒れたが、ともかくも大政治家としての井伊直弼も
いる。その他禪僧としては白隱門下の俊足たる東嶺禪師もそれ
である。しかし近江聖人と呼ばれる陽明学派の偉人は中江藤樹先
生であり、藤樹先生のうちに杉浦梅慈先生を出したことは、両先
生を目指して近江の出した教育家・徳望家として双璧と称すべきで
ある。」

と、東京朝日新聞編集部の藤本尚則氏は「国師杉浦重剛先生」
に記述した。

さて、編集子からの依頼は、明治以降の教育家を中心とする
土教育史を執筆するようとのことであったが、大きな潮流を概
観するために平安初期からさかのぼってみたい。限られた紙面の
つどうその他により、郷土の先覚の列伝にどどまるであろうこと
をおことわりしておきたい。

最澄

—道心を骨子とする人間尊重の教育—

比叡山に日本仏教の祖といわれる新宗派をつくった最澄は、通
説によれば七六七年（神護景雲元年）八月、近江坂本の地に生ま

れた。十二歳で、近江国分寺の大國師である行表について出家した。後年鎌倉時代になって、彼の流れをくむ法然や親鸞等が新宗派を開いたが、このことは、最澄の教えがいかに偉大なものであるかを示したものといえよう。

東大寺で受戒を終えた最澄は、当時十九歳であったが、突然奈良から姿を消して静寂の地比叡山に登った。入山後間もないころに作られた「願文」は、特に名高いものであり、青年僧最澄の熱情をあらわしたものとして思想方面はもとより、文学上からも高く評価されている。その内容とするところは、強くおのれをかえりみ、道を求めてやまない氣迫をこの書にこめ、次の五つの誓いをたてた。

一 自分の修行の完成しないあいだは、他人のことに口を出すまい。

二 さとりを開くことのできるまでは、修行以外に心をむけまい。

三 自分の修行の完成しないあいだは、他人のことに口を出すまい。

四 さとりを開くことのできるまでは、修行以外に心をむけまい。



最澄木像
(滋賀県坂田郡山東町觀音寺所蔵)

代教育の規範としなければならない。

中江藤樹

—致良知の教育—

まず、藤樹精神が、現代においてどのように生きているかを郷土の学校の経営方針からひろってみる。

滋賀県高島郡安曇川町立青柳小学校

一 本校教育がめざしている人間像

藤樹精神を、わが國教育の目的にあわせて本校教育にいかす。鎌草（藤樹の著書名）に、人間幸福の第一を、「身やすく、心たのしご」とある。身体が健康で、心がさっぱりとして楽しく、のびのびと自主的であることがまず望ましい。

翁答（藤樹の著書名）に、人の道を行なうに「愛敬」を「至徳」とされている。人間を尊重し、愛敬し、鎌草の「人倫日用の交り」として実践し、よき社会人にならせたい。藤樹先生が、明徳を明らかにすることを根本として、意志づよく一生学問された態度は、子どもの勉学に大きな教訓となる。これらは、よき心の「致良知」や、常に努力する「當下一念」に通じる。

二 本校教育を貫く重点的な理念

藤樹先生は学徳を修められ、聖人という最高の人格を形成された。一個人として、深さにおいて広さにおいて計り知れないほど偉大である。この偉大さは普遍的であるから、身近に接していくれば、万人それぞれにおいて理解し、感銘するところが多い。この現実は、人間的理解を、子どもを教えるすべての

い。

三 仏の定めた戒法が守れないあいだは、ほかの法会に招かれても行くまい。

四 一切のものに対し執着がなくならない限り、世間の一切のこととかり合うまい。

五 これから修行によって得られるところの功德は、ことごとく生きとし生けるものにめぐらし、一切をあげて悟りの境地に至らしめよう。

その意氣の盛んなことをしのぶとともに、この決心が生涯を貫いたことを思うときに、この願文の意義がきわめて重大であることを知るのである。

七八八年（延暦七年）、二十一歳のとき比叡山に一堂を創建した。これが一乘止觀院で、その堂に自刻の藥師如來像を安置した。のちの延暦寺根本中堂である。ここで、彼は多くの学僧を養成していくが、その実力が認められて八〇六年（延暦二十五年）には天台宗が公認された。

最澄は、深く僧侶の国家社会における地位を自覚し、かつまた奈良末期の混乱の原因等をかえりみて、画期的な教育法を規定した。その内容は三種類に分かれてい、通称「六条式」、「八条式」および「四条式」とし、この三式を総称して「山家学生式」と呼んでいる。このうち、六条式の内容は、「国宝とは何物ぞ、宝とは道心なり。道心あるの人を名づけて国宝となす」という文ではじまる有名なもので、一隅を照らす人間こそ国宝であると主張し、道心を骨子とする人間尊重の精神をといた。これこそ、現には天台宗が公認された。

嘗みにはたらかせ、藤樹精神を地でいく教育を進め、職員全体の研修による深まりによって、漸次、指導内容の整とん、方法の技術化をもはかっていく。

一六〇八年（慶長十三年）三月、近江高島郡小川村で生まれた。一六一八年（元和四年）、はじめて「大學」を読み、「自天子以至庶人」、壹是皆以「修、身為」本。」の語をみて、感嘆して聖人になろうとした。その意図は、功名でもなく、富貴でもなく、人間最上の道を修めることにあった。藤樹、ときには十一歳、このようないい幼少の身でありながら、すでに聖人の片りんを示していた。

江戸時代にはいり、これまで貴族・僧侶・上級武士に独占されてきた学問は、幕藩体制の完成とともに広く武士や庶民にまで解放されるようになつた。学者も、商家から伊藤仁斎や本居宣長が、また、農家から中江藤樹や二宮尊徳等が出て、学問が支配階級であった武士の独占物ではなくなつたことを立証している。

また、このころには、儒学が仏教にかわって新しく精神界を支配するようになつてきた。朱子学は、君臣の名分を強調したことから幕府の保護を受けて大いに栄えたが、やや理論にはしりすぎた。

さて、中江藤樹は儒教の立場から教育を論じた、江戸時代での最初の人物である。朱子学派の「格物致知」に対し陽明学派の実

うに、内在する靈宝を明らかにすることが明徳であるとし、「大學」にその出典を求めていた。

さらに、良知とは良心であって、人はみなことさら学ばなくて良知という本尊をもつていて、この本尊に気がつくことが致良知であるとした。すなわち、良知は心の本体で純一無雜・眞實無欲の天理であり、明鏡のように一点のくもりもない状態をさして

戯的な知行合一説の立場から、藤樹は、学問の本義を人倫の實行であるとし、孝が陽明学派の「致良知」の本体であると解き、身をもつて模範を示した。孝こそ教育の基礎であり、「明徳を明らかにするのが孝の本意である」と、その著録問答に述べている。ここでいう孝とは、通常考えている親孝行よりももつと深い、広い意味をもつていて、すなわち、道徳理念を根本とした、すべてに適した孝であり、私を破る心が孝である。しかも、この孝は愛敬に適している。さきの翁問答では、「孝徳の感通をしてぢかくなづけいへば、愛敬の二字につづまれり」とある。君子の關係も、父子の關係も、友人の關係も、五倫五常すべての道徳は愛敬の二字におきかえられるものであるとした。

つぎに、明徳の教理に触れてみたい。そもそも人間の内には宝があり、その宝が欲情や名利でおおわれていて、それを、混ざりものの多い鉱石の中から宝石を掘り出して金鉄をより分けるよ

うて、ここで藤樹の教育論とも名づけられるのをあげると、「わが身は親に受けたれば、すなわち親の身なり。親に受けたるわが身を分けて、子の身となしたるものなれば、子の身も根本は親の身なり。子をもぎと育てて悪しき道へ引か入るるは、親の身を悪道へ落とし入るるに異ならざる故に、子によく教へざるは大不幸の第一なり」との彼の言は、教育の世代的連續性すなわち前の世代の文化財を次の世代に伝達するものであること、および子

女の教育に関する両親の義務を適切に指摘している。

その他、民間にあって庶民教育に徹して生活難をものともしなかつたり、女子教育の必要を説き、討論を好み、発明・発見やくふうすることの重要性を強調したことなど、当時としてはまさに卓見のものもちねしであった。

さいごに、藤樹の門弟のことについておきたい。その高弟の熊沢蕃山は仕えた備前候池田光政の施政の全般にわたって功績を残したが、教育の面においても藩校の道場を開いたり、手習い所を設けて庶民教育の普及に力をそそいだ。また、さらに、門弟のひとり大野了佐を医師にしたことは特筆に値する。伊予大洲から、はるはる藤樹の教えを請うために江洲へ来て、医書を学ぼうとした。他の門弟とちがい物覚えが悪く、わざかなペーパーを一日かかって教えられてもすぐに忘れてしまった。藤樹は大野の熱心さ誠実さをあわれんで根気よく教え、大変な苦労を重ね、十年間の修業ののち、大洲へ帰って開業するまでになつた。彼のために「医方大成論」を百回も一百回を読んで聞かせ、また、彼ひとりのために医書を書わしたほどであった。

杉浦重剛
（1）人事をつくして天命をまつ
（2）校歌
（3）「山清く、水うるわしき近江の湖、湖ぞいのせせは、よき人を生みつ」（佐佐木信綱翁が恩師杉浦重剛先生をしのんで歌つた歌）、郷土の先覚、杉浦先生の徳をしのび、歎慕して、さらに「仁に当たつては師に譲らず」といった杉浦精神を体して、この校歌は「よき人を生まん」と歌わせている。

（4）人事をつくして天命をまつ

藤樹の場合と同じように、重剛精神が現代においてどのように現場教育に脈々と伝わっているかを、郷土の学校の経営方針からひろってみる。

剛 重 浦 杉

一八五五年（安政二年）近江膳所で生まれた。膳所には遵義堂といふ藩学校があり、七歳からでないと、はいられないところを、特に才能を認められて五歳のときに入學し、きびしい教育を受けた。十一歳のとき、當時遵義堂の教授であった高橋坦堂の門にはいり、孟子を習ったが、その師の偉大さにつくづく感服した。坦堂の死後、十二歳のとき、同じ膳所の出身である蘭学者黒田麿麿の塾にでしいりした。ここでは、漢字、蘭字、英仏語、数学、理化学および天文学を学んだ。黒田は理化学に特に秀でていたので、杉浦は、その感化をうけて理化学を専攻した。十四歳になり、京都の岩垣月洲の遵古堂へはいった。識見超凡、詩文をよくし、何ごとも正しい意見をもつた。貢進生の制度は明治三年にできたが、彼は十六歳のとき、膳所藩からはじめて大学南校へ入学した。

留学中には、理化学を研究しながら物理の法則を人事に応用する考え方を思いついた。たとえば「草や木の葉は、日光の力によって空気中の炭素を吸いこんで酸素を出す。ところで、この草や木が薪炭となって熱を出すことができるのは、生きているあいだに太陽の熱を貯蔵したからである。偉い人がそのもの世になつてあがめられ光を放つのは、この自然の道理と同じように、生きているあいだにたいへんな努力をして熱力を貯蔵したからである。日本の國の「神」というのは、大いなる人、常人とは違つてすぐれただ最も偉かつた人をいうのである。死んだのちにそれを尊敬して「神」というので、つまり生前精力をよけい貯えた人のことである」と。

そして、このよつたな考え方を、彼は「理學宗」とみずから名づけ、中国でも「至誠神のごとし」という言葉があり、宇宙万物はみなこの誠の道であるとといた。菅原道真を崇拜した彼は、「こそなこの誠の道である」とといた。

聖人或可追。後進非無欲企及者焉。先生之靈幸昭鑑。

ころだに誠の道にかなひなは祈らずとも神や守らん」という道真の歌こそ理学宗の神ずいであるとした。

杉浦の終生の悲願は、日本を世界一流的国にすることにあつた。この場合、世界一流の国とは、道義に根源をおく国家であつて、そのためには仁義の精神を中核として至誠をつくす人材の養成を教育の目標とした。

となつて、一八八五年（明治十八年）には、平賀義美など心のあつた六人の人たちといつしょに、私立東京英語学校をつくり、五年後には二代目校長となつた。それから二年経つて学校が焼けたので、苦労して再建し、日本中学校と名を改め、一九二四年（大正十三年）に死亡するまで三十四年間この学校の校長職にあつた。ここでの根本教育理念は、「人を待つに寛、身を持つに厳」というものであつた。この卒業生は、有名人が多いが、なかでも小坂順造、岩波茂雄、小村欣一（寿太郎の子）、長谷川九一（芳

写真説明
滋賀県立膳所中学校（現膳所高校）生徒のために書かれた藤樹先生を祭る文

藤樹二百五十年祭が行なわれた明治三十年、杉浦は、写真の祭文をしたため、十二月二十五日に藤樹神社に京都の塾友を代参させた。そのときの直筆。

近江聖人乎。東洋聖人乎。抑亦宇内聖人乎。聖之所以為聖。古今東西蓋ニ其揆。已為ニ近江聖人。所ニ以為ニ守内聖人。壽僅四十。其德千尋。仰之弥高。鑽之弥堅。雖然賢不肖不在天。人一能之已百之。人十能之已千之。果能比道矣。聖人或可追。後進非無欲企及者焉。先生之靈幸昭鑑。

之助の子）、横山大輔、佐佐木信綱および大熊喜郎などがある。さうこに、杉浦の日本中学校在職時代のおもな業績をあげてみたい。明治二十一年には文部省参事官兼専門学務局次長、同二十三年東京文部院創立、衆議院議員、同三十年高等教育会議議員、国学院学監、同三十二年皇學講究所幹事長、同三十五年東京同文書院院長等。とくに、大正三年、六十歳で東京御学問所御用掛として、帝王学の根幹となる倫理の進講の担任は、民間の一中学校長である杉浦をおいてほかにはないということで、決着をみた。この進講の内容は、広く日本の國がら、世界の大勢、思想の潮流、宗教の分布、哲学の種類、歴史・地理・天文学等の自然界の現象、ことわざ、格言、諺、偉人、英雄、詩曲、すもう

にまで及び、実に驚くばかりの広範囲にわたっていた。

逸話としては、宮中某重大事件、ボーリマス講和条約の際の小村寿太郎全権の支持、大津事件と勝海舟のことなど数多いが、ヨーロッパに富むものとして、貢進生のころ、ボロボロのチョッキを着ていたために、上着を着たままでヨーロッパが脱げたほどであったといわれ、このような気風が、のちの旧制高等学校の弊衣破帽に影響したという話は、愛きょうがある。

浅見綱齋

— 知行の根本・敬の精神 —

山崎闇斎は、朱子学の一派である南学を天下に広め、その門下六千人のうち、浅見綱齋は佐藤直方、三宅尚斎とともに崎門の三傑といわれた。綱齋は、一六五二年（承応元年）、近江高島郡太田村に生まれた。この年は、中江藤樹の没後四年にあたる。はじめは医師になるつもりであったが、志をかえて儒者となった。終生仕官をせず、京都で学を講じた。厳格な性質で、講義中はでしたちに絶対声を出させなかつたが、その反面には細心の情も深く、友愛と奉養をつくした。

また、貧苦のなかにあって学に精励し、「赤心報國」の四字をきらさんと長刀をおびて尊王の大義を重んじた。その著「靖献遺言」によれば、徳川將軍や諸藩主に対する關係は主従であつて君臣ではない。義は義であるが「大義」ではない。日本人として「大義」という場合は天皇に対するほかは考えられないとした。本書



山路一遊

— 知識を生みだす能力の養成 —

一八五八年（安政五年）松山市に生まれた。七歳のとき、松山一帯で、滋賀県師範学校校長の職にあつた。当時、全国師範学校長等を歴任したが、学資の関係で、たつた一年でやむなく退学した。明治七年、東京師範学校卒業後、文部省普通学務局属官、同視学官詰、高知、香川尋常、兵庫尋常、愛知尋常各師範学校長等を歴任のうえ、埼玉、福島県視学官をへて、明治三十五年から大正二年まで、滋賀県師範学校校長の職にあつた。当時、全国師範学校長の中、彼の右に出るものがないとまでいわれた。その教育目標は、日本人がとかく島国性においていやすいのをいましめ、どうしりと落ちつき、目前の利害にからわることなく、大国民としての素質を樂きあげることにあつた。

その教訓の例として、次のようなものがある。

一人は常に社会の暗黒面を見るべからず。

明教館で漢学を修業はじめてから教員を志し、明治七年、十七歳のときには、すでに大阪で小学校の教員をしていた。翌年には、向学の志やみがたく、三高の前身である大阪英語学校に入学したが、学資の関係で、たつた一年でやむなく退学した。明治七年、東京師範学校卒業後、文部省普通学務局属官、同視学官詰、高知、香川尋常、兵庫尋常、愛知尋常各師範学校長等を歴任のうえ、埼玉、福島県視学官をへて、明治三十五年から大正二年まで、滋賀県師範学校校長の職にあつた。当時、全国師範学校長の中、彼の右に出るものがないとまでいわれた。その教育目標は、

日本人がとかく島国性においていやすいのをいましめ、どうしていきりと落ちつき、目前の利害にからわることなく、大国民としての素質を樂きあげることにあつた。

一 遊路山

— 帰化人の活躍 —

W.H.ボーリーズは、アスリカのカンサスで一八八一年に生まれ、ロッキー山脈の東ろくで育つた。中学・大学時代をコロラドで過ごし、工学部に学んだ。ある年のY.M.C.A.の大会で、ハドソンテラー夫人から中国の義和團事件による、キリスト教弾圧についての報告を聞き、キリスト教伝道に献身しようと決意した。

が尊王倒幕、王政復古の指導書となつた影響を考えると、儒教精神がついに支那に逆に輸出される結果になつた事実は、見のがすことができないのである。

綱齋の教育觀を約言すると、「万世の為に太平を開く」にあつた。その意は、皇統護持をとなえ、天地の公道にもとづく太平こそ万世に通するものであり、幕府治下の平和には満足できないとした。

晩年には、教学の帰一点を「敬」においた。この場合、敬とは正確に教え、審問、慎思のゆとりを与え、自学自習をするためだ。その意は、皇統護持をとなえ、天地の公道にもとづく太平こそ万世に通するものであり、幕府治下の平和には満足できないとした。

晩年には、教學の帰一点を「敬」においた。この場合、敬とは精神がついに支那に逆に輸出される結果になつた事実は、見のがすことができないのである。

綱齋の教育觀を約言すると、「万世の為に太平を開く」にあつた。その意は、皇統護持をとなえ、天地の公道にもとづく太平こそ万世に通するものであり、幕府治下の平和には満足できないとした。

だめだめ、日本に来ないといふやうが、一九〇五年（明治三十八年）近江八幡の商業学校の英語教師として赴任したが、生徒にバイブルを読みせだいとがわらわらして免職となつた。しかし、生徒の中に吉田悦蔵のトトがいたので、ボーリグはこの地を去らぬ決心をし、京都に建築事務所を開いた。

その後、吉田悦蔵の尽力で収益をキリスト教の伝道費に使う約束でメンソーラーの権利を譲り受け、近江兄弟社を設立した。ボーリグは、県下に多くの教会を設立し、全国に巡回による伝道を行なつたほか、近江兄弟社学園、同図書館も經營した。戦時中は外人であるがゆえの苦難もあつたが、一柳満喜子夫人とともに帰化してめでたしを實じうとした。戦後、皇室に対するかくられた功勞も大きく、純潔・禁酒・禁煙の運動をつづけた。昭和三十二年には、近江八幡市名誉市民第一号の称号を授けられた。

八幡商業七十周年記念が興の祝辞に、次の文が残つてゐる。

Congratulation To HASSHO

On this occasion of celebrating the 70th year of HASSHO's useful history, I take great pleasure in offering my heart-felt congratulations.

I have never forgotten the happy years I spent with this school in Meiji 38, 39 and 40. Its success is always a joy to me; and I pray for its continuing and increasing influence upon the lives of its students. — in developing them in BODY, MIND and SPIRIT.

MERRILL VORIES HITOTSUYANAGI

Nov. 4, 1956

なあ、一柳満喜子夫人は、一家の主人は、近江八幡出身の基督教者西川吉之助の三女で、隣居である滋賀の福音・宗教および英語教育についての面倒をみた結果、せとへん山田に贈呈はるゝに由の意志が発表され、めでたしに教育したむじゅう山田へとある。（荒川勇著「特殊教育史」文部省報1058号）

おわりに

元来、教育史を論ずるにあたつては、必ず、その歴史の流れの本筋をつかみ、これに關する人物を側面的にながめてゆく方法が常道ではあるが、筆者の能力やまとめた資料の不足なれども、最初におことわりしたように人物列伝に終わつてしまつた。

後日、本稿の不備、誤記を補う論文が必ず上梓されるであつたら、それを期待しながら筆をやく。

参考文献

園庭杉浦重剛先生（藤本寅龍）

比叡山と高野山（藤野謙三）

藤樹先生（原社藤樹神社）

姫見綱齋先生（滋賀県立今津中学校）

鶴舎山路一遊先生（鶴浜同窓会）

滋賀の先駆教育的人間像（滋賀県小学校長会）

人物を中心とした

京都府教育郷土史

竹中暉雄

— 維新動乱期のオピニオン・リーダーたち —

幕末の京都。下京は高倉通り錦小路上の貝屋町に、書々塾という名の寺子屋があった。この家はもともと米屋が本業であったが、いつの頃からか商売のあい間をぬって近所の子供たちに読み書きを教えはじめ、安永年間にはついに篤志軒と称して寺子屋が本業となるようになつた。幕末慶應の頃の当主は八代西谷良圃（明治二十四年十月没、六八歳）で淇水と号している。

西谷はその頃、長州藩士広沢真臣（兵助）、上京の大年寄で筆墨商場居堂主熊谷直孝の息子直行、円山四条派画家幸野棟讀ら、革命家や維新運動に共鳴し、円山派画家森寛齋（長州出身）の家に密会し親交を持っていたが、おそらくその中で維新完遂には教育の力が不可欠だと論じられていたのであるう、彼の頭の中には新しい時代にみあつた新しい教育の場の確立が必要との考えが、次第に凝固してくるのであった。

そして慶應三年五月、彼は「幼童教導之弁」を町奉行所に提出して教育の必要性を説き、「勸学教導所」の開設を建議、十月大政奉還されるとさつそく十一月には大学寮の復興を新政府に訴え、さらに翌四年一月、鳥羽伏見の戦いのさなかに、従来の町役たちは無学のため政治が腐敗しきっている実情を非難し、この際人材登用・役人の首のすげ換えの不可避なることを上言したりした。

同年二月、新政府は王政復古というスローガンのいきがかり上、國学者たちに教育改革案を作らせてみて、その答申中から、「大学

寮代」の名称だけを採用し、京都学習院を大学寮代と改称したりし

西谷家には慶応三年仲夏という日付で、西谷淇水の署名入りの一封文が残されている。そこには「文事亭一之江の手書」とある。この文書は、西谷淇水が開いた文事亭の手書きの文書である。

の寄付金を勧奨するものであるが（これもやはり広沢らとの討議の中から生まれてきたものであろう）文脈から倒幕後新政府が学校設立に乗り出した時点を想定して、その時に人民に訴えかける準備のためにつまり予行演習のために草された草案であることがわかる。そこでは「今般府所ヨリ……市中ノ場所ヲ撰ビ給ヒ、教導所ヲ建營アラセラレ、貧富ニヨラズ幼稚ノ教育ヲ御話話有テ……東修ハ素ヨスニ及バズ」。さらには「仮令稽古出席中、雨雪ノ愁アソトモ、傘持參ノ持拂ニ不及、夫々人別ニ宛行ハレ……」とまで、意をつくして

二 苦惱の楳村正直

学校設立を、府に勅告していた山本覚馬（元会津藩士、戊辰戦争で失明、獄にいたが、その博識のゆえに京都府顧問に任用され、のち初代府会議長ともなった）など、オビニオン・リーダーたちの圧力も作用していたのは確かである。

一方、教育制度構築をめぐる新政府の情況に眼を転じてみよう。明治元年から三、四年にかけては、倒幕の激狂的エネルギーの爆發力を可能としてきた、攘夷ストーリーの起爆剤が敝履のごとく捨て去られ、全く逆の新しい目標が追求された。

元年十月底に筆作鶴谷が十一月に元老院議長として、洋学者が国学者たちの間に割り込んで教育制度改革に活動を開始し、洋学者が国学者たちの間に割り込んで教育制度改革に活動を開始しはじめると、元年十二月に学制取調掛が任命された時には十二名までが洋学者が占めることになり主客は完全に転倒される。中十名までが洋学者が占めることになり主客は完全に転倒される。開明派官僚の代表格である木戸孝允は、元年十二月普通教育の普通教育として、歐米文化



直 様 村 藤 博 文 が「國是綱目」のなかで「人々ヲシテ知
識明瞭タラシム」ために、開明的な大学校を急務として、歐米流の学校制度を全国に実施するよう政府に建言し、翌二年一月には伊

人々の関心をひくように構成されている。

この文によれば「學問ノ道ト云ハ、難字古事ヲ覺ユル勤ニアラズ、唯人ト生レテ人タル者ノ大道ノ要ヲ求ムニアリ」「人幼時ニシテ不学時ハ、生涯身ヲ全クシ、學事ヲ脩ムルコト不能」と考えられていた。忠孝といふことも強調されてはいたが、しかしそれは、一生浮薄の状態に流れないと、それ 자체が目的とされていたのではなかつた。

ここに流れている基調は、元年十一月、各町年寄と議事者とを集めて京都府官が行なつた、徹頭徹尾功利主義的な小学校設立奨励告諭、さらには五年八月新政府の「被仰出書」などと同じ色合いのものであるといえる。なお西谷家には『西洋事情』初篇（慶應二年十二月発行）から抜き書きしたノート類などが残されており、渕水がうけた福沢諭吉の影響が推察される。

こうした西谷の諸計畫は「遂に黙殺されてしまった」（京都府教育史上）との評価もあるが、しかし、当局の方は「習字師西谷良

團ト云者、市街ノ習字師ヲ廃シ洛中ニ一ノ学校ヲ興シ、平民ヲシテ入学ノ自由ヲ得セシメンノヲ建言ス、府厅其議ヲ可トシ……」と文部省に報告しているから（文部省年報明治八年）、西谷からの突き上げを受け入れたことを認めていたのである。

ともあれ京都府が番組小学校制度の建設という大事業に乗り出した背後には、西谷やさらに彼の同志でやはり元年八月に「小学校創立制法之論並用途見込之弁を建白している書林主平野屋茂平（下京六角通柳馬場西入る）、さらには、同年六月、「我がラシム外國ト並立、文明ノ政事ニ至ラシムル」ために人材教育の重要性を指摘し、

小学校の制度を提唱する。そうした時、新政府は明治二年二月既述のごとく、幕末に、西谷淇水らと維新後の学校設立計画を練つて、た広沢真臣執筆の「府県施政順序」において庶民対象小学校の設立を各府県に奨励したが、各府県とともに未だそれが実現化されうるような状態ではなかった。

國民を作るには、まず第一に人々の意識の改造を行なうことが決定的に重要であり、そのためには小学校制度の整備は猶予のならぬ急務であった（小学校が成人教育の場にも使用されたことは周知のとおりである）。全国的規模で実行できぬなら、まず手はじめに一つの地域で実験してみよう。そして白羽の矢は、遷都の令こそついに出てはしなかつたが、今まさに千年間にわたる王城の都としての地位を喪失しつつあり、「市民の失望落胆はその極に達し、人心銷沈し、百工蕭条し」、公卿・諸侯・志士・御用商人らが続々と東京へ移住しつつあった（公同誌、草史）京都の地に立てられたのである。

楳村は暮末、血氣盛んな戦士として、のちに、町を奔走していた。その彼をこの任に推薦したのは、他ならぬ広沢町だつたといわれている。広沢は、地方官の任務は「教育と保護

の二つに止まる」（「日記」所収「公用備忘録」と考えていたが、

この時、新政府最高の官職・三職の一つである参与の地位により、元年五月底から十一月頃までやはり京都府御用掛を兼務していたのである。

また楳村は教育普及に腐心していた木戸の「懷刀」ともいわれ、「天下」のことを考えずに車駕車幸の阻止を叫ぶ京都人たちのわからずやぶりを嘆き非難していた（元年十月一日付日記）木戸がそのゆえに、京都の新生を賭けて試みられていた実験に大きな関心を寄せてそれを励ましていたことは、楳村あての書翰（明二・五・一付、三・三・三付）などによって明らかができる。

さて、元年九月に熊谷直孝らが種痘館「有信堂」で始めた教育が母体となって、二年五月開業式を挙げた上京第二十七番組小学校（現柳池中）を皮切りに、同年十二月までに市中六四の小学校がすべて開校することができた。これがわが国最初の近代的公立小学校制度の滥觴であったが、それは中央政府の期待を一身に背負うものであったから、本来なら一番の障害となるべき設立経費も、その大部分は元年九月の天皇東幸に際して京都府に下付された米一万石、金十万両（幕府からの没収財産）の中からまかなわることができたのである。

これほどどの支持と援助をうけていたのであるから、楳村としてはこの実験事業に失敗することは到底許されない。しかし小学校ができたといつてもそれは番組という封建的遺制を利用して、半ば強制的に行なわれたのであって、人々は未だその必要性を十分認識していたわけではなかった。困苦の立場に立たされた楳村にどうだせば、馬にまたがって辺境にも巡視にめぐり、時には校名を標札として墨書きしてやることもあった。

明治四年春の試験で、句読の成績の極めて秀れた生徒が四名いた。うち三名は男子であったが残る一人は八歳の女生徒で、名を岸田年といい、東洞院松原の呉服商小松屋の娘であった。この試験に立ちあつていた楳村は、彼女のあまりの才媛ぶりに感激し、名を俊子と改名させ、またすぐに官費で中学での修業を命じたのである。京都府中学をでた明治十三年、十七歳の時、彼女は宮中に呼ばれて文書御用掛となり、皇后に孟子の講義をしたりしたが、宫廷の生活に耐えられず、一年と少しでそこを飛びだし、そのかわり日本立憲政党的な官員となり、自由民権と男女同権の運動に飛び込んだ。

そして明治十五年、岡山遊説中に、景山英子に生涯の進路を決する重大な影響を与えた、また明治十六年には大津で「婚姻の不完全」を論じて罰金刑をかされた彼女が、のちの湘煙中島俊子であることはいうまでもない。

楳村はその後明治八年七月権知事、明治十年一月には知事になつたが、教育に対する異常な熱意を示しつづけ、教師の採用試験答案を自ら採点したり、「小学女児手引草」という修身読本、「私用文語」という作文習字のテキストをいくども改稿しながら自ら著してはいる。また公文書などにこと教育に關することはいかなる

細かことにも一々朱筆を加え、役人たちからけむたがられた。

明治八年九月、ある教師が日曜の休校化を訴願しても、現在は非常の勉強をすべき時として不可。明治十年三月、学務課員が近頃のテスト結果から判断してそれはむづかしすぎるのでと、カリキュラ

て有効な手段はただ説得あるのみである。

当時、学校設立のために発せられた「布達告示は出積し、何れも丁寧委曲を極め、意氣横溢至誠熱烈、人を動かさずんば已まざるの概あり」、「出任楳村正直氏等、市民を懇諭奨励する熱心を極め、事務を整理する昼夜を分たず」（京都小学五十季誌）といった努力が積み重ねられた。元年十一月の府官告論（前記）を一読すれば「さもありなん」と思われるを得ない。

それでも心もとないと思われた地域には次のような非常手段が講じられた。ある時、丹羽某という人物から学校設立の必要性を切々と論じた建白書が長谷信篤知事のもとに提出された。当局は、「それも、心ある市民はこのように思っているではないか」と、これを町民説得上の有力な武器として使用した。そのために丹羽某は町民憎悪の的となり、遂には夜逃げ同然に家をたたまざるを得なくなつた。後年楳村が「不憫なことをした」と事の真相を語ったことによれば、それは府当局の「知諭者によりて秘密に仕組まれた一場の狂言」だったというのである（同上）。

こうして生まれた小学校であったがゆえに、当初就学率は芳しくなく、明治初年生徒数六〇三名という全国でも大規模な寺子屋白景堂（下長者町智恵光院東入、鑑主古河亮朝）の寺子をそのまま引き継いだといわれる小学校で「児童数僅かに十名足らず……勧学獎励のために児童に昼食を与え学用品を支給する等愛撫に努め」ねばならぬ状況であった（出水小学校創立九十年記念誌）。

そこで楳村は試験などとあることに各校に官員を派遣し、自らもできる限り巡回したが、明治五年以降都部にも小学校が設立されしている。

後年民権派の大坂日報が「（京都）府の干涉主義は楳村旧知事以来日本一の名物」と評したのも（明治19・11・21付）故なしではない。

この楳村は明治十四年一月元老院議官に転じ、明治二十九年四月、六四歳で没した。

三 お雇外人教師たちの奮闘

京都府の教育はただ単に小学校教育においてのみでなく、その他多様な分野で先駆的に着実な発展の成果をあげていくのであった

が、もちろんそれが横村ら一部府序の要人のみの手で遂行されたわけではなく、諸事業の成功のために、献身的な努力をした多くの人々が存在した。

助手として日本最初の独和辞典『和訳独逸辞書』を出版するという記録を残している。

で、最初に雇われたのはプロシヤ人ルドルフ・レーマンである。早くも明治三年十一月に生徒募集されている独逸学校の語学・数学教師として赴任した彼は、もともとカールスルエ一工科大学卒の技術師であり、当時は専門家として重用されていた。

医学予備校が設立されてからはそこで教鞭をとったが、明治十四年十二月末日付で経済上やむなく解雇された（横村の後任で有名な疏木工事にとりくんだ「土木知事」北垣国道の方針による）。しかし彼の信望が府庁内でいかにあつかったかは、明治十四年九月北垣自身が、彼は日本の人情風習等にも詳しく（彼は来京以前に大阪で日本婦人と結婚していた）、教授法も秀れており（実物教授などを実施）、このまま帰国さすのはもったいないからと、大阪府知事に彼をひきつづき雇用してくれるよう訴願している事情にもうかがわれる（結

京外国语学校教師)。彼はもともとの技術を發揮して京都府の工業面の發展にも努力しきて、その学生たちを

この彼も明治十四年七月に北垣知事の方針で解職されたが、三たび明治十七年九月から明治二〇年三月まで今度は府女学校の英語教師を勤めたのである。

学一般なども教えた。彼の教授法は歴史・地理はほとんど暗記一本櫻だったが、理科では野外にてオブジェクト・レッスンなどを施したという。

彼はその宗教上の信念から徹底的に厳しい規律的生活を送り、そのためには生徒たちのふしだらさはようしゃなく取り締ったが、生徒たちへの愛は深く、自費で制服や寝台を作つてやつたり、さらには、自らハサミをとつて生徒の散髪をしたり、彼らが外出する時には服にブランシをかけ靴を磨いてやつたりさえしたと伝えられている。こうした師弟関係を、明治七年六月に仏学校を巡視した文部卿木戸孝允は「生徒等も教師ヲ恋フル事父ノ如シ」と表現している。

このジユリーもボールドウイン同様、文部省からの外人教師給料停止のため明治九年三月解雇されたが（仏学校も同時に閉鎖）、その

文部省に訴えたのである。文部省から外人教師終業校と外國語学校に彼を任用することにしたため、府は从学校生徒中の優秀生を彼につけて東京に送った。その後しばらくしてこの生徒たちへの官費支給が停止された時には、ジュリオは彼らを彼の官舎にひ

きとり、就職先までみつけたのである。

明治十年、任期きれで生國へ帰ることになった彼が京都に立ち寄った時、彼の意思もあったが府は旧仏學校から四人、師範學校から三人、中學校から一人の優等生を選抜して彼とともにフランスに派遣し、それぞれに諸工業の技術を学んでくることを命じた。彼らの留学中にもジユリーは絶えず学校や工場先を巡回して指導を続けた。

留学生のうち二人は若死してしまったが、残る六名は帰國後、染物・製糸製茶・製麻・機械・織物・陶器などの分野でそれぞれわが國工業界の發展に尽したのである。

以上のように独、英、仏の語學教師たちはみな同時に何らかの形

なおその他のお雇い外国人として、舍密局で活躍した独人ワグネル。療病院・医学校（現府立医大）の基礎を築いた独人ヨンケル。フォン・ランゲツク（彼は極めて日本語に通じており、忠臣蔵を独訳して本国で出版したりしているが、同時にまた日本人を侮蔑すること甚しく、明治九年三月解雇、代りに蘭人マンスフェルトが雇われた）。牧場・農学校に雇われ農牧業教育の発展に貢献した米人ジエームス・ウイードらの名を忘ることはできないが、ここでは詳細を省かざるを得ない。

四 中等教育における労働者

その他、京都府の中等教育の草分け時代を切り拓いた邦人たちの

目録には、慶応年間に医学研究会や理化研究会（煉真舎）を組織、明治になってからも府の倉庫局などで理化医学教育また勧業

方面に功大であった明石博高。米人グリフィスの福井学校での弟子で、明治六年以來アメリカのラトガス・カレッジに留学し、明治十

二年十月帰朝の直後府学務課に採用され、主として中学校確立の仕事にあたった福井県人今立吐醉。明治十三年府立画学校（当初は芸術学校というよりむしろ工業学校の性格をもつていた）の設立と教

育に功あった田能村直人（初代校長）。望月玉泉・幸野模嶋など。明治九年六月開校式をあげた師範学校のなかで最新のアメリカ式教

授法（開発主義）の普及に活躍した城谷謙（東京師範卒）。中山親和（大阪師範卒）などの名を並べねばならない。

私学においては第一に新島襄の名がでてくる。上州安中藩士だった彼は、早くから藩命で蘭学を勉強し、次いで幕府の海軍伝習所に学んだが、広く知識を世界に求めたいとの情おさえがたく、元治元年六月、国禁を犯して函館からアメリカに脱出した。そしてアマースト大学で理学、アンドバー神学校で神学を学んだが、たまたま四年冬、米国に到着した岩倉使節団に邂逅、文部大臣田中二摩呂の通訳。助手となって、米・仏・英・独・露國などの教育事情をみてまわった。のち文部省から「理事功程」の名で出版されたレポートは新島に負っている。



明治七年十一月、キリスト教主義による中等学校ひ島明治八年四月横村正直と府新顧問山本覚馬（前出、彼の妹と新島は結婚）にて、それぞれ滯米中に知りあつた木戸孝充と、海軍伝習所での師勝海舟からとの紹介状をもつて京都に乗り込んできた。

古来、浄土宗や真宗など仏教のメックである京都の地に「ヤソ教」の学校が設立したのはバックの力がものをいつたからでもある（横村自身はキリスト教に理解がなかつたが）。かくて明治八年十一月、同志社英学校が寺町丸太町上るの仮校舎で開校された。その聖書教室は（校内でのバイブル講義はしないというのが開設認可の条件であった）現同志社大学付近の豆腐屋の二階であった。この同志社の門から中島力造・元良勇次郎・金森通倫・浮田和民・小崎弘道・横井時雄・徳富蘇峰・蘆花・海老名彈正・大西祝・北畠素之・安部磯雄・柏木義円など、後年わが国文化の多方面で活躍することになる青年たちが続々と巣立つていったのである。

明治十一年九月には同志社女学校も開設されたが新島の総合大学設立の野望は絶ちがたく資金集めに奔走中、明治二十三年旅先で病死してしまった。

明治初年、府の要人たちがいかに福沢諭吉に信をおいていたかは、三年中学の教師として彼の弟の福沢信之の助を登用しようとしたが、福沢に慶應義塾の分校を京都に開くよう依頼している点にもうかがえる。同分校は小学校取締所（中学）の一部を貰うされ、入塾希望者は同取締所に申し出るようとの府令が出される（七年二月）ほど、府の積極的支援をうけて開校したが、皮肉なことに府の各洋学校の盛況に圧倒され半年もたたずで閉鎖されてしまった。

丹後宮津町では明治八年七月、天橋義塾が開業した。設立者は旧宮津藩士の子・小笠原長道である。彼はそれまで綾喜郡の小学校教師であったが、宮津の旧士族たちが金禄公債の切り売りをして徒食しているのを残念に思い、彼らに教育を与えようとしたのであった。しかし同時に同塾は小学校教員に一般教養を与え、また民権思想の流布をも目的とするものであった。

小笠原長道は明治九年五月洋学を志し慶應義塾に入学したがほどなく退塾、そして民権議院設立建白者の一人小室信夫の養子となり（小室信介と改名）、のち大坂日報（一時、大日本立憲政党新聞）で民権の論陣を張っている。

当初同義塾の教師は栗飯原騒である。彼は生来左足が不自由で武術にはむかなかつたため学問一すじに生きてきた漢学者で、安政六年から明治四年まで藩校礼讓館の学頭をしていた。明治十一年九月には慶應出身の綾喜部文藏も加わって英・数を担当した。同年同塾の社長となつた沢辺正脩（もと綾喜郡の小学校教師）はのち国会開設期成同盟の幹部となつた人である。

天橋義塾は一時結社人四四〇余名、生徒数百人近くになつたが財

五 言う教育の開拓者・古河太四郎

現在京都市北区にある府立盲学校には「日本最初盲院」という古ぼけた看板が今も掲げられている。左スミの署名に知事横村正直とあるから実に明治十四年以前のものであることがわかる。

明治六年頃、上京の第十九区堀川下長者町下るの同区長で砂糖商を営んでいた熊谷伝兵衛は、近所の姉弟二人のろう児が教育不可能と打ち棄られているのを何とかせねばと思立ち、同区の小学校（現待賢校）の教員古河太四郎らに相談を持ちかけた。古河らは前例のない仕事で当初躊躇していたが、熊谷の熱意に押されて遂に明治八年他区からの生徒も加えて、有志者の献金を資金に同校でろう生の教育に着手したのである。

明治十一年には盲生の教育にもとりかかり、こうしてわが国における言う学校教育の歴史が開始された。

古河太四郎（弘化二年～明治四十年十二月）は寺子屋白景堂の塾主古河亮朝の弟であり、熊谷と共にこの未踏の事業に精力を傾げた

は盲啞教場の設立を横村知事に建議していた。

ところがその少し前の中治十年十二月、これとは全く別に「盲啞訓鑿設立を促す建議意見書」を知事に提出している人物がいた。名を遠山麗美といふ愛媛県士族で、かつて横浜に留学していた時、外人から欧米の盲ろう教育について聞く所あり、日本にも学校を開設したいという熱情を抱いたのであるが、どうして京都にあらわれてきたのかは明らかでない。

遠山はあくまで府立の施設を要求していたが、初めから危険を冒すことを恐れた府は、古河らの計画に従って私立の盲啞院としてこの設置を認めた。不満であった遠山は二月に再度府立たるべきことを主張する伺書・哀願書を府に提出している。

(東洞院御池上る舟屋町)を仮校舎に明治十一年五月開校することができた。生徒は盲生十八人、ろう生三十六人で教師は古河、庶務には遠山と第十九区長があたった。

設立・維持の費用はそれぞれ社寺・有志からの寄付金七、三〇〇

余円と、市中各校から

の月一円の集金六四円

によってまかなわれた

(明治十七年頃には生

徒数一五〇名に増加、

古河、姫姫賃座敷賦金からの

援助もうけるようにな

つた)。



六 貧児教育にとりくんだ竹中庄右衛門

明治十二年四月には遠山の希望通り府立となり、九月には釜座橋木町下る(現府庁の南)に新築移転したが、その頃にはもう遠山はなぜか京都から姿を消してしまっていた。全く府立盲啞院を生み出すためにのみ突然現われ再び突然消えていったのである。

そこで古河は、すでに明治十一年十一月にそれまでの経験をまとめて「京都府下大黒町待賀校着啞生教授手順概略」を起草していたが(これは日本最初のろう教育教授法論で、明治十一年三月の文部省『教育雑誌』付録に発表された)、明治十三年九月からは「自口食力の便を得しむる」ために職業教育を始め、さらにまた彼が苦心の未考案した数々の方法・技術——ろう生のための発音法・画圖問答法・手勢法・盲生のための木刻字・針跡字・感覚法など——は広く国内のみならず海外からも見学者をひきつけたのであり、古河がわが国の盲ろう教育史上に最初に残した足跡は巨大かつ偉大である。

明治の末年になって、盲ろう教育と並んで特殊教育の主要な分野である智育運れの子供たちの教育(当時はまだ概念があいまいで不適応児も同一視されていたが)を開拓した人に鷹田良吉がいる。

いた。彼らは代々現在の四条寺町付近に居住し、御所での仕事を業としていたのであるが、天正年間に豊臣秀吉が各所の寺院を寺町に集中させたとばつかりをうけて、その昔藤原道長が廃舎に使用したといわれる該地に強制移転させられたのである。

その子供たちが昔から市中とは切り離され、教育とは縁のない生活を送らざるをえないのを見過すことのできなかった竹中は、明治十一年四月、夜学会を組織し、自ら教鞭をとつて青少年の教育に腐心するようになつたが、その反応はまだ冷笑のみで早くも明治十三年には閉鎖せざるをえなくなつた。しかし彼はくじけることなく機を見て明治二十年に再開したがやはり二年目で中止。明治二十八年三たび着手。それもまた一年で崩れてしまう。

それでも彼の意志と熱意は挫折することなく、困難と失敗の連続は一層その事業の意義あることを裏書きし、彼の決意をさらに強化するのであった。そして遂に明治三十一年五月、今度は夜学会組織を改めて、公立小学校へ通えぬ子供たちのために義務教育を施す目的の夜学校を設立したのである。地元の三町も今度は積極的に支援し、地区の小学校からは一日二名ずつの教員が派遣されることになった。庄右衛門二〇年来の夢は今ここに実を結んだ。子供たちのために授じた、またその後授じる多額の私財も彼には問題ではなかった。この夜学校は明治三十七年一月、私立協同夜学校として府の認可をうけて再出発する。

村上清蔵は同夜学校開校以来、竹中のよき理解者であり、そこで子供たちに体当たり教育をしてきた教員である。昼は栗田校で一日を過し、夜は疲れた体にムチ打つて雨の日も風の夜も夜学校にかけつ

参考文献

『京都府教育史』上

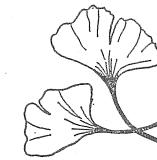
『京都府百年の年表』(5)教育編、その他

(追手門学院大学講師)

人物を中心とした

大阪府教育郷土史

三 沢 井 浩



いちょう

大阪の地域は、古く大阪城をもとに、近郊の中世城郭が殆ど破壊されて、天領や遠国大名の領地として細分化されて支配されたために、一国一城主歴代支配といった地方と異なり、管内には僅かに高槻藩、麻田藩、丹南藩、狹山藩、伯太藩、岸和田藩の六藩があつたのみで、それぞれに書院、直方堂、丹南学校、簡修館、伯太坂学校、講習館といふ講學を設け、藩士の子弟に藩費をもつて東脩謝儀をとらず、主として漢籍を教えていたが、後には国学、洋学、算数、習札などを教えた。或は京都から儒者を招き、或は儒官として教授に任じ、明治初年には、東京中学の規則により、教育の近代化を計ったものもあったが、廢藩と共にすべて廢校となつた。

しかしこれに対して大阪が、江戸に対する経済都市として、即ち俗にいう算盤の町として、商工業に励むかたわらに、学問教養にしようとめるという町人学者の町でもあった。町人自ら出資して学舎を設け、また町人自体が師匠として学問の講義をするというのが大阪の町であつて、ここに大きな特色をもつ所である。

大阪市中では、徳川吉宗の実学奨励にもとづいて、享保九年（一七二四）町人学者道明寺屋富永芳春、三星屋中村良貞、舟橋屋長崎克之、備前屋吉田可之、鴻池屋山中宗吉の五同志が、中井塾庵を中心として、京都から三宅万年を学主に迎えて開講され、中井塾庵は五井蘭州と共に助教授として協力した。同十一年には幕府からの許可をうけて半官半民の形となり、諸役免除を認められた。後中井竹山、同履坪の学主の時代が最も盛で、経書の素読のみでなく、漢籍の講義も極めて専門化された。庶民層の聽講者多



庵 井 中

く、商都大阪に大きな貢献をなしたものである。

富永仲基、加藤竹里、山片幡桃などここに学んだ人々である。大阪の商人たちが、算

盤をはじきながら、学問の道にわけ入った町人学者の町であることとを記する第一のものである。

大正五年新懷德堂が復興されて、人材の教育、教養に当たったが、戦災で書庫のみを残して廃滅した。いま旧蔵書は大阪大学に保管されている。大阪の学校はまず私学からの語の出る所以でもある。

享保二年（一七一七）懷德堂の創建に先だつこと九年前、平野郷の土橋友直ら末吉氏と共に、学問の庶民化を目指して含翠堂を創建した。京都の大儒伊藤東涯、三宅楓瀬らを招いて講席を設けた。土橋友直は医薬を主に、国学にも造詣深く、また早く三宅石庵に学んだ。含翠堂では、主として儒教を教え、実践窮行を重んじた。また国学、算数、医薬のことも教授した。

伊藤東涯が平野に来た時、河内国八尾の商人小山屋善介衛門石田利清や扇子屋甚三郎らに招かれて講演をし、塾が設けられて環山樓と名づけた。

文政八年（一八二五）讀破の人藤沢東陔の設立した泊園書院は、古文辞学派の大坂における中心として發展し、その子南岳につがれていでその子英鶴また父の跡をつぎ、泊園書院に教授としてつとめ、後衆議院議員となり、南北朝問題で論難したことがある。

また早く中天游の思々齋塾が京町堀に、医業のかたわら蘭学塾としてあり、また傘職人から大阪蘭学の祖となつた橋本宗吉の絲漢塾考などの著書があり、維新に際しては維新政府方の立場をとつた。

洪庵は、天保九年（一八三八）大阪に居を構えて蘭学塾を開き、医学と共に西洋の学術を教えた。大村益次郎、福沢諭吉、橋本左

内、大鳥圭介など、明治維新の変革時に際し、日本洪の独立と開発発展を軌道にのせた人々は多くこの塾の出身であった。

ことに福沢諭吉

は、大阪堂島にあった中津藩の藏屋敷に生まれた。いま阪大病院の玄関前に、その誕生地記念碑がある。また大村益次郎は、京都で難にあい、大阪病院で手術をうけたが効なく、いま国立病院東南角に、その殉難報国碑が建っている。

洪庵はまた近代医学の師であり、我国で初めて種痘を行ない、かつこれを一般に普及させた功績も大きく、コレラの流行に際しては、細心の注意をもって防疫とその治療に従事したことは有名である。

文政十二年（一八二九）国分村（柏原市）の医師柘植常興が学舎を設け、立教館と名づけて、子弟の教養につとめ、大和郡山藩士の子弟や近隣の農村の子弟たちが、入寮したり通学などで勉学した。嘉永六年には代官鈴木町勤務の設楽八三郎より賞として金一封をうけている。次第に学ぶ者多く、文久三年には今村の西尾直彦、同直策、岡田忠夫、塙山新七らの協力のもとに、新しく講堂を新築した。常に六、七十名の入寮者があり、近隣に聞えた。常熙は、葛城

山人と号し、懷德堂中井竹山に儒学を学び、のち頼山陽について修業した。世に山陽門下の四天王の一に数えられた。また医術を小石元端に学び、医業を開くと共に立教館を設けたのである。

仁和寺村（枚方市）の中村弥平治は、幕末から明治にかけて漢学者として名高く、俗に「だんご先生」と呼ばれていた。早く家塾を設け、読書、習字を教え、生前早く門人から碑を建ててその徳を仰がれた。こうしたことは各地区に数限りなくあった。

石切村（東大阪市）の長曾根家の祖曾根平左衛門は、代々村の庄

屋をつとめた家柄であり、また村の子弟のために、自宅において読み書きを教えていた。いまその図が珍しく残されている。

維新となるや、町人の町大阪に、文明開化のさきがけとして、官設の大学の始まりが出来た。東京から移されて、明治元年専修学校と称して理化学の教場が谷町三丁目に設けられ、翌年五月蘭人ハラタマを教頭として開講、専門教育の最初のものである。一方同年九月

大阪洋学校

が、川崎村の役宅に開校

し、大阪は東京に対する都

市であるから東西に相設け、また商売に重きをおく



大阪洋学校

が、川崎村の役宅に開校し、大阪は東京に対する都

市であるから東西に相設け、また商売に重きをおく

所であるから、文運の開化はるかに東京に劣る故、この洋学校を設けて大阪人に学術の何たるかを知らしめることにあつた。いま府原本部の西方に建てられてある「専修局地」の碑の裏に、「關西近代學術濫觴之處」とある。

三年五月専修局は理学校、洋学校は島町に移つて大阪開成所となり、ついで理学校を併合、六年四月開明学校、七年二月外国语学校となり、八年一月には大阪英語学校、十二年四月大阪専門学校、翌十三年十二月大阪中学校、十八年大学分校となり、翌年十一月には第三高等中学校となるや、京都に移される被目となり、折田校長の式辞の中にも、大阪は学問の地ではないとして京都を礼讃している次第である。

初等教育

初め大阪府は、新政による新府庁造営のため、明治元年の入費六三万両余の多額を算し、大蔵省も会計立ちゆき難しとのことで、教育方面的の施設に対し、大きな期待をすることが出来なかつたが、これが出来た。翌年一月開校、府属の子弟は勿論、一般庶民の児童の入学を目標に、洋風二階建て、屋上に望楼を設けた校舎の中で、読書、習字、算術を教えた。翌月これを小学校と改め、九月には東本願寺境内にいま一校を増設した。入学は十五歳以下を原則としたが、有志のものには別に入学を許した。

しかし二万に及ぶ学齢児童に対して、僅か二校の小学校では、何のすべもなく、また官費も増校には及ばず、南区自管の法を一般にすすめるため、五年四月諭達を出し、大阪は古来三都と称し、その三府の一にありながら学校の設備の備わらないことは東西両府の百にも近い学校を設けているのに比して、全く府民の不幸を來し、ひいては三都の名のみで、終には野蛮の器を來すものとして、小学の設置を勧奨し、ために次第に市内に小学校の設立をみるに至つた。

旧大阪府における明治初期の教育の進展は、四代渡辺昇知事に負責が多い。明治五年五月学制発布に先立ち、小学生心得書を大奉書紙一枚に摺り、府下小学校の開校式には、自から乗馬で臨場し、これを当日出席の生徒父兄に手渡した。これには十一ヶ条にわたる小学生としての心得が記され、これをそれぞれ屋内の壁に帖付して、父兄は時に子供に読みきかすよう述べている。

池田市役所の稲垣日記に、

明治七年一月二十六日 旧暦 晴天

豊島郡第一区第一小学校当郷学校開き付、大阪府権知事渡辺昇公入來ニ而、当郷并区内男女児ニ夫々父母之内附添罷出候処申渡且小学生心得書御渡ニ相成候事

とあり、また池田小学校校庭には、この時臨場の渡辺昇知事の「登龍門」と大書した記念碑が建てられている。

学制が発布されると、旧大阪府では、渡辺昇知事の「学制解説」が一般に配付されている。日柳政惲は、三舟と号し、有名な日柳燕石の子で、

漢学をよくし、兵部史生、陸軍共学大属を経て大阪に入り、渡辺権知事の下に学事に奔走し、学務課長、師範学校長を歴任、自からも実業学校を起として子弟を教育し、また浪華文会も設立、教科書の出版をなし、府内学事の先駆者である。

また旧堺原では、「学問の心得」という小冊子が編まれ、六年正月早々各々配付されて、学制の趣旨徹底につとめている。

これより先、天保年間堺に郷学所を始めた小川宗右衛門の後をうけて、小林新助が嘉永四年（一八五一）八月郷学所付属人となり、郷学所を九間町に移して校舎の修築を行ない、面目を一新、今橋の懐徳堂と同資格を幕府から認められ新助まで士格に準ぜられて帶刀を許された。しかし明治元年土佐藩鎮撫のため堺に来り、郷校及び藏書を没収し、学舎は閉鎖されてしまい、新助また堺を去った。

明治元年四月堺県知事小河一敏再び郷学所を復興し、坐摩神社の勝浦鞆雄（もと中村式部）を学長に招き、皇典を基として漢学を教授し、翌二年学館と改称、堺市中の私塾、寺子屋はすべて学館の指导下におかしめた。また学館より各町の集会所に講師を派遣した。同三年九月着任した税所篤知事は、教育の振興に極めて積極的で、翌年四月堺天神社内に郷学校を設け、経学、筆道、算術の三師をおき、士民老幼に限らず入学を勧めた。これは後に県学、ついで河泉学校と改称され、中学を併置するに至った。旧堺県の勉学の中心となつた。

これと同時に河内国三の瀬（東大阪市）に小学校を設け、この地域の者の入学をすすめ、和泉の堺の郷学校と対称的とした。これ

助教とした。

六年五月には六四校を増校し、一八校の設置となつた。しかしこの増校分は、尋常小学ではなく、実際上は村落小学の形をとつたものであるが、表面上はその地域の人々の不安を配慮して、各村の有力者のみの心に置いてこれを公表しなかつた。とともにかくにも学校を設けることに急務であった次第である。

土屋弘は岸和田藩士の家に生まれ、藩学に学び、鳳州と号した。

そして藩学講師となり、維新後明治五年より堺県学講師、ついで堺県師範学校長に任じ、また学務課権中属として、井東恒徳、渡辺惟積、朝比奈清らと共に、旧堺県の初期学校教育の創設につくした功績は大きい。皇朝言行録、書法略解、入門読本、巡警日記など多くの著書がある。後奈良尋常師範学校長から華族女学校教授に赴任し青年子弟の訓育に傾倒した。このため堺宿院小学校長の時代には、同じく岸和田藩士の家に生まれた藤田守は、十一歳の時藩主岡部侯の小姓となり、維新後堺県学の句説教授として、近代教育の創始期に活躍、後また官立大阪師範学校を卒業して、堺師範学校訓導として初等教育に尽した。明治十年天皇行幸の際には、堺熊野小学校で教員指導に当たり、和、河、泉三州に歴任して漢文学を主として

青年子弟の訓育に傾倒した。このため堺宿院小学校長の時代には、

その教法をもって宿院小学の名を高めた。著書に地誌略訓、小学校字、下等小学公私作文楷模、修身入の基などがある。

また同じく明治八年四月宿院小学につとめた生駒東太は、その訓育、学校管理のすぐれた教育上の模範として、近府県からの参觀者多く、在職二十八年文部省より賞をうけた。また堺市会は、満場一

旧堺県の近代教育への方向をつけた最初のものである。

こうした勧業によって各地に自立的に学校が設立され始め、古市（羽曳野市）の端山周平を中心近郷の有志相より、すべてを賣く生長せしめることを目標にした雑学園の創設があり、また日下（東大阪市）の河澄雄治郎は、芝村（東大阪市）の木積一路らと共に日下村正法寺に郷学村を早く創始し、一般子弟の教育を計り、後には自宅をすべて提供し、また教員の経費すべてを負担するなど大いにこれ努めた。

翌五年四月には、堺市中の私塾、寺子屋まで、すべて読書、筆通、算術を指南しているものを同月十五日限り廃止せしめ、市中各区に県学分校を設けて、篠塚義四郎、野口若岐、上田信曉、高山保次郎、小西六兵衛、平野屋藤兵衛、和田屋幾太郎ら町人学者多数をまじえて二〇名の教授人を置き、すべての子弟を最寄りの分校に入学するよう指示した。

和田幾太郎は、小林新助にも学び、明治元年漢学用掛となり、学校出席並びに出席の時は、苗字帶刀を許された。また後には学半舎という家塾を開いて居り、時に河泉学校の助教となり、小学視察掛、小学校長などを歴任、その間小学、女紅場、裁縫場生徒の試験委員をもつとめ、文部省より教育上の功績を賞されている。

かくして和泉国二五区、河内国二九区にそれぞれ一区一校を原則に郷学校を設け、その下に数か所の郷学出張所を置いてその地域の児童の就学に便した。六年四月には堺の県学を河泉学校と改めて教師養成の機關となると共に、その分校はすべて小学と改め、教員を



致をもつて、その
遺族に終身年金百
円を贈った。いま
堺南宗寺に立派な
碑がある。
田 藤
明治九年九月句
讀並びに習字助教
として、山辺小学校

校（豊能郡能勢町）につとめ、また大阪師範学校で下等小学校授業法を伝習、教育に従事したが、後根根庄村長となり、勤儉翁の名をもつて知られた森本玄良は、明治十五年以來教育の発展を企図し、從来村にあつた各種の講をやめて、その費用をすべて学資にふりあて、また祝祭日の酒食に費した共有林の利をも次第に学資金に蓄積し、学校林を設けて学校基金積立の法を講じる一方、また篤志家の寄付を勧奨し、明治二十七年より蓄積金の利子と財産の利益とでもつて、村内第一小学校の外は、第二、第三、第四小学校共に、その教育費を支弁してなお余裕あるに至つた。今立派な表彰の碑が存している。

山村（泉州郡東馬取町）戸長田中武八は、この地区の合併した小学校を尾崎村に設置されると、山村から片道五十丁の道を、七、八歳の児童をして朝夕通学せしめることは可哀そうだが、無暴だとして、別に当村に学校設置の必要を再三にわたって学務委員に懇請したが、容易に認められず、終に単身堺県庁に行き、県令税所篤に歎願これつとめた。県令その熱意に感激、その願いを聞き入れ、

自己の懐金から教員

の給料として、三円
宛九ヶ月分を、開校

費用二円十銭と共に

渡し、ここに明治六

年四月五一番小学と

して、山中村に校舎

が設けられ、村民に

喜ばれた。

明治末年太田尋常

小学校長（八尾市）

として十八年勤続し

た仲野定次郎は、野

児童には嘘をい

わないと徹底せしめ、村人には、その紛争の解決に常に信頼をうけ

た。

また西野末吉は、明治四十年四月から田井中学校長として赴任

するや、学校の一隅に寝泊りして、深更には自ら校舎の内外を見

廻り、また未就学者を集めて夜学を行ない、村内を巡回して教授す

るなど、教育の充実につとめ、二十五年勤続、二千有余の教え子に



左より中西儀兵衛・滝山瑄
豊田文三郎・原嘉助

の教化につとめた。いま校庭に記念碑がある。

大和郡山藩士大井伊平の長男に生まれた大井収は、郡山藩校の助教となつたが、明治十年法善寺村（柏原市）に移住し、一時柏原小学校につとめたが、辞して家塾津積塾を開き、世利を求めず、ひたすら漢籍を主に青年教育にはげんだ。

女子教育

普通学のみでは女子の就学に効果のうすいため、明治七年五月堺市内開口神社に仮教場を設けて、中央女紅場の名をもつて、女子に必要な芸能を、漢書、筆算などと共に教える所とし、原則として下等小学終了者を対象としたが、事実は学年児も入学していた。

次第に分校を設け、また北、南の両女紅場を設立、その後和泉の貝塚、河内の既革、豊浦にも設置された。豊浦女紅場（東大阪市）は光乘寺に設けられ、その寺の藤橋なおが最初の助教となり、極めて裁縫に堪能があったという。いまにその辞令が残っている。

幼児保育

明治十一年二月小学在勤の女教員木村末、氏原銀の二人を上京させ、官立東京女子師範学校付属幼稚園に、保母見習として入学せしめた。翌年五月帰阪したこの両名は、北区南安町に設けられた府立模範幼稚園に保母として幼児の保育につとめた。同時に保母見習生を募集し、保母の養成にも当たった。

同十三年市内東区の有志越後屋豊田文三郎、豊島屋滝山瑄らが主唱して、愛珠幼稚園が設立され、共にその幹事となつた。幼稚園児使用の恩物をみな国産品をもつてし、色紙の有害のものを発見して無用のものに改める等の努力は大きかった。また当時世人の幼稚園

の唱歌とクリスチヤンの讃美歌を同一視し、幼稚園はキリスト教の宣伝と信じる者多く、このために園内に神殿を設けて、その隣をといたのは、この幹事豊田文三郎の着想であった。いま大阪市立として御殿幼稚園の名をもつて呼ばれている。

十六年府会の決議によつて、府立模範幼稚園は廃止された。このためまた別に、同園の倉庫を借りて、中洲幼稚園が開かれた。

中等教育

中学校は、明治六年四月難波別院に設けられた欧学校に始まり、集成立校となり、米国人へースらを雇い、外国人による英語で普通科の授業をなし、また別に進級学校が設立され、国語で普通科を教えた。明治十年合併して大阪府一番中学校となり、北野中学校と改称された。この後増校されるのは、明治二十八年のことで、第二（堺）、第三（八尾）、第四（茨木）の各中学校で、女学校も明治十五年大阪師範学校内に付属裁縫場として設けられたのが始まりで、同十九年六月初めて大阪府女学校と改称された。しかし男女とも中等学校の発展は、明治三十二年の菊池知事の教育十年計画によつて、漸くその軌道に乗つたのである。

明治の末年八尾、市岡、岸和田の各中学校長を歴任した坪井仙次郎は、小学農業編の著述があり、同じく八尾中学校につとめた西山金太郎は、郷土史の調査研究に大きな努力を払い、伴林光平、木村重成などの伝記の著述と共に、生徒の指導に温厚篤実、郷土の尊重に功あり、一校あげての声望を集めた。その退職に際し、一住宅を同窓会より譲りた。

職業教育

大阪の地が商業の町でありながら、商家の子弟のみその教育を内にうける形で、維新後もその近代的な設備は生まれなかつたが、明治十三年に至つて、五代友厚ら外十数名の協賛によつて、西区立南堀に私立大阪商業講習所が設けられ、商業の専門的教育に一步を進めることとなつた。後の私立大阪高等商業学校である。

また明治十九年野口圭太郎は、市内の有志伊庭貞剛、泉田次郎、豊田文三郎、菊池侃二ら二十数名の同志を得て、同二十年四月東区備後町に仮校舎を設けて、商業教育につとめた。私立大阪商業学校である。

また三十一年には、仏人ジョセフ・ウォルフによつて、明星外国语学校が設立され、夜間授業を始めた。のち明星商業予備学校となつた。

特殊教育

明治十二年府立模範盲育学校が設立され、学務課長日柳政憲、教員者柴田隣太郎、有志田村太兵衛、江口南右衛門ら、非常な努力をもつて、その経営につくしたが、不幸府会に於て経費全廃となり、十三年六月廃校となつた。しかし有志者大前博厚らこれを遺憾とし、南区大宝寺町に、私立としてこれを存続することを計つたが、その経費に困却、同二十五年廃された。

このため私立大阪教育会員清水常次郎は、盲啞学校設立の建議

を知事に提出、漸く二十九年一月大阪市会の協賛を得るに至ったが、これまた経費の問題で成功しなかった。

時に盲人五代五兵衛は、有志の協力をえて、その急務を説き、苦難の後漸く、同三十三年私立盲啞院の設立をみることが出来た。

医学校

明治二年二月上本町の大福寺に、初めて仮病院として、オランダのボーワインを教頭に、適塾緒方洪庵の長男惟準を伝習御用掛として、診療と医学教授に当たった。しかし四年には文部省に移り、高橋正純が院長、蘭医エルメレンスが診察と教授に当たった。ところが学制改革に際して、文部省はこれを廃止したので、鴻池善右衛門、住友吉左衛門らの有力者によって再興され、大阪府病院とし、また教授局をおいた。教授局は十三年分離、大阪府医学校となつた。明治二十七年教諭としてつとめた佐多愛彦は、同三十五年春年三五歳で校長兼院長となり、結核、ペストの予防と治療に大きな貢献をなし、また常にすぐれた西洋学術をとり入れ、人材養成につとめ、その名聲を博した。

社会教育

また明治八年府立博物場が設けられ、翌九年五月には府立書籍館が開かれ、後常安町に移されて、十一年にはその隣に教育博物館が建設され、近代教育の道標となつたが、のち廢されて、いま図書館のみが、住友吉左衛門の寄附に依つて中の島図書館として残されている。

教育会

明治七年八月大阪府は、別に会則を定めず、選学のための集会として、教員及び学区取締による興学議会を設けたが、八年七月教育会議と改め、学事諮詢機關として、毎大地区を単位に月一回常会を開いた。これは訓導会議、取締世話掛会議、訓導取締世話掛会議の三部に分れ、教則、教授法や学資、勧学等教育に関するすべてを議した。

十四年一月には教育諮詢会となつたが、十九年三月府会の要望により大阪府教育会が設立され、郡区長、府立学校長、小学校長及び府會議員を会員とし、第一回会議が開かれたが、翌年には実益なしとして経費の廃止となり、中止された。

この公設の会に対し、十八年十二月西六小学校長根来圭一郎、大阪師範学校長山中立藏、大阪中学校長矢部善藏、大阪師範三等助教諭古川良之助、南船場小学校長沢田恒次郎、大阪師範一等助教諭直太郎、法學士砂川惟峻らが起し、市内の会員を中心として、私立大阪教育会を設立、府下各地の教員参加し、私立大阪教育会報告なる会誌を発行、教育の進展と普及につとめ、当初一五九名の会員をもつた。

三十二年四月大阪府教育会と改称、会誌を大阪府教育会報と改めた。

参考資料 大阪府誌 大阪人物誌 各区郡史誌 各市町村史誌
(大阪府教育百年史編集室長)

人物を中心とした

兵庫県教育郷土史

兵庫県立教育研修所



(県花 のじぎく)

□はじめに

兵庫は大県である。北は日本海に面し、南は瀬戸内海に臨む。その面積約八、四〇〇平方キロメートル、人口は約四七〇万人を数える。

本県教育史を語るとき、日本の二大開港場としての國際港都神戸を持つことを忘れてはならない。本県教育の進歩性、実利主義もここに起因する。明治十一年、東京商法講習所につぐ神戸商業講習所の設立や、明治三十六年官立高等商業学校（神戸大学の前身）の開設があり、また、外人経営によるミッション・スクールも多い。その主なものをあげると、神戸女学院（明治八年）、開拓学院（同二十二年）、松蔭女学院（同二十四年）、日ノ本女学院（同二十六年）など、日本人創設の親和女学校（同二十年）とともに本県女子教育の開拓的役割を果たしてきた。

兵庫県は摂津、播磨、丹波、但馬、淡路の五か国を含み、江戸時代には多くの藩領や幕府領、あるいは各藩の飛地に分かれていた。それら各藩の藩校——姫路一五万石（酒井氏）の好古館など一八校や、庶民教育機関としての郷学、私塾、寺小屋を核として、学制發布後、明治九年には八〇七校の小学校が開設され、県教育の基盤がつくられたのである。

明治三十〇年代は本県教育の躍進期であり、小学校児童就学率も明治一〇年代の四〇%から九四%と上昇し、中学校の整備充実、私学に頼り全国レベルに遅れをとっていた公立女学校の開設、御影、姫路、明石師範（女子）再編等めざましいものがあった。この時期につくられたのである。

おける発展の理由としては、日清戦争を契機とする日本の産業革命が県財政を豊かにしたこと、当時の行政担当者の並々ならぬ熱意があげられよう。

大正期の教育は明治とは異なった特色を持ち、師範学校教育においては、岡田五兎、野口援太郎らの、軍隊式教育から人格主義的教育への改革があり、及川平治の分団式運動的教育学などの自由主義教育が全県を風靡したほか女子教育の発展、学校スポーツの発達、社会教育の振興、入試準備教育の激化等、現代的様相を呈していく。

やがて昭和初期の深刻な不況時代に入り、欠食児童救済の学校給食の開始、郷土教育の振興があり、軍国主義教育、そして民主主義教育への激変を経て現在に至る教育界の流れの中で、幾多の人物の活躍があるが、本稿では県教委発行の「兵庫教育」誌上に現れた「兵庫の教育者」の中から主な人物をあげて、その紹介を試みたい。

一 池田草庵（但馬聖人）

文化十一年（一八一三）県北、但馬の養父郡宿南村に生まれ、終

満福寺での仏道の修行を捨てて学に志して上京、相馬九方の塾に下僕

を兼ねて学んだ。後に京都松尾山にこもり独居六年、かれの人格、

学問の基礎が形成され、初めて京都一条に開塾したが、二年後但馬

弘化四年（一八四七年）から三〇余年間、門弟七〇〇余人を數え、幾多有為の人材を輩出している。久保田謙（元文部大臣）、浜

尾新（元文部大臣・現東宮侍従浜尾実氏の曾祖父）、北垣国道（枢

二 ハ・エル・ハウ（幼児教育の草分け）

一八五二年、米国マサチューセッツ州に生まれ、デアボーン・ロッ

クフォードの両セミナ

リーの音楽科並びにシ

カゴ幼稚園のフレーベ

ル養成所等を卒業後、

幼稚園教育の豊かな経験を積んだ。

三十歳のとき、神戸

の宣教師デビス氏の招



きにより、神戸の地に幼稚園創設のため單身来朝し、日本最初の独立機関としての二年課程の保母養成所、頌榮保母伝習所を開設した。とき明治二十二年十月二十二日、同年に頌榮幼稚園も併設された。なお、當時県下では、兵庫、神戸、博愛（尼崎町）、竜野（竜野町）の私立幼稚園が明治二十三年までに相前後して開設された。

女史が神戸市をはじめ、県、全国の幼稚教育の黎明期に果たした役割は大きく、そのころの幼稚教育についての研究は微々たるものであったが、女史はつとに「幼稚園唱歌」（明治25）「保育学初歩」（明治26）のほか、「保育学講義録」「開発的教育」「幼稚園原理と実習」など多数の著書をあらわした。

なお、女史は明治三十九年に日本において最初の幼稚園教育者の団体である「J・K・U」（基督教日本幼稚園連盟）を組織し、その会長となってわが国の幼稚教育の発展に尽くした。また、前述の保母伝習所の卒業生を、県下をはじめ、京都、前橋、神奈川、根室、広島、高知など全国各地に派遣して、新しい幼稚園の創設やその教育に奉職させた。

米国人であり、また、一私学人としてのエ・エル・ハウ女史が、

その長い九十二年の生涯の大半を本県はもちろん、わが國幼稚園教育のために捧げたその足跡は、幼稚教育史上に永久に銘記されるべきであろう。

三 望月クニ（幼児教育の母）

明治元年、岐阜県に生まれ、東京女子師範学校（現お茶の水大学）を卒業後、仙台で女学校、女子師範、幼稚園に勤務ののち、明

治三十九年、神戸市立神戸幼稚園長として招請され、念願の幼稚園教育に専念することとなった。当時、幼稚園は未だ保母中心主義の保育に流れ、教育の場としてははなはだお粗末な状態であった。研究意欲に燃える女史は、大正元年京都大学の心理学教授松本亦太郎博士に教えを乞い、檜崎浅太郎博士の指導のもとに科学的指導の基礎を築き、その尊い経験から保育方法は一変され、保母中心から幼児中心となり、一齊保育から個性尊重の指導へと進んだ。

また、女史は幼稚園の法令改正のために県下、全国各地に檄をとばし、數年にわたり熱心に陳情、請願をつづけ、ついに当局を動かし、大正十五年四月二十日、勅令として幼稚園令が公布された。その他、幼稚園教員の資格や待遇についてもその差別待遇を憂い、これが是正に努力し、各市の保育会と連絡をとりながら運動を続け、遂には幼稚園保母にも恩給が支給されることとなった。

一方、社会教育にも関心を寄せ、大正十二年、少年保護司を委嘱されその頗著な功勞等に対して、表任官勲八等瑞宝章を受けた。また昭和四年、サンフランシスコにおける第五六回「アメリカ社会事業大会」に出席し、かの地の幼稚教育についても見聞を広めた。

昭和八年、二十七年間にわたる神戸幼稚園長の職を退き、神戸諏訪山々麓に私立神戸愛児園を設立、同十七年、兵庫県私立幼稚園連盟を結成し、初代理事長となった。戦後においても焼跡で無心に遊ぶ幼児の姿を見過すことできず、いち早く幼稚園を再建するなどその生涯を幼児教育に捧げた。

四 稲田忠太郎（同和教育の先達）

明治三年、攝保郡攝保村に生まれ、竜野中学校（五郡組合立）一年を修了し、明治二十五年代用教員として母校の小学校で教鞭をとった。その後独学によつて小学校本科正教員の資格を得、明治三十年、養田尋常小学校校長兼訓導として赴任した。かれは眞に子どもを育てるにはその土壤である家庭、地域の開拓が必要であるとして往復一二糠の通勤時間さえ惜んで校下の同和地区に泊り込み、地域の開拓にめざましい成果をあげた。

かれの偉大な業績の中に、矯風会（後の積善社）の設立がある。

「……誠ニ彼等ノ生活状態ヲ査察セシニ業務ニハ勤勉ナレトモ

後國ノ急薄ク隨テ資産ヲ有スルモノノ少ナク剩ヘ教育衛生等ニ関ヘル知識ハ殆ド絶無ナルハ児童ヲ欠席セシムルモ敢テ怪ムニ足ラス是ニテカ始息ノ策ハ以テ彼等ヲ救済スルノ道ニアラサルヲ看破シ同村治氏ニ謀リ郡長ノ公認ヲ経テ明治三八年一月コレカ啓発機関トシテ矯風会ヲ組織シ……」と、かれの書いた「積善社事業一斑」の冒頭に地区改良への動機が示されている。

事業の目的としては、※義務教育の趣旨徹底、※言語風儀の改良、※納稅義務の完了、※衛生思想の涵養、※防護思想の養成、※公徳心の眞視である。その会に戸主会、婦人会、青年会の三部を置いて明治三十八年一月以来、毎月これを開催して六綱領の実践を行つた。明治四十年、矯風会を積善社と改称し、事業内容も道路の改修、みかん苗の植栽、「からかさ講」、衛生設備改良講の設置、各

戸への貯金箱の配布など、いゝその広がりと深さを加えていった。その効果は著しく、児童の就学率100%、出席率96%、貯蓄者は増え、人々の風紀も見違えるように改まるなど目をみはるものがあったという。

歳暮り、星は流れて人々はやがて歴史の中に埋没する。だが、誠

実の汗とともに播かれた一粒の種は、花を開き実を結んで輝かしい

未来をつくる。国民的課題として全国的に取り組む同和教育の現状を思うとき、黄泉のかれも感無量であろう。

五 広田虎之助（二部教授への反骨）

京都に生まれ、明治四十三年本県学務課長田中勝之丞（元豊岡尋常中学校初代校長）の推舉により、京都から高砂小学校に招かれた。かれの一聚森式算術教授法は有名で、全国各地から參觀日があえなかつたという。

當時、日露戦争のため、教育費節減の目的で二部教授（ひとりの教員が二箇学級を担任）が大幅に採用され、戦後においても教員不足対策と教育費節約の妙案として引き続き実施された。特に本県においても眞の方針としてこれを奨励し、明治

助之虎田 広 末年には全国第一の二部教授実施県となつた。

これが実施については最初から御影師範学校長和田豊らの厳しい批判があり、一般からも歓迎されなかつたが、服部一三原知事、田中學務課長を先頭とする推進論に公然と反対論を唱えることは困難であり、やむなく追随する態度であった。そうした中につれてかれは、敢然と兵庫県教育会機關誌「兵庫教育」（現在も継続発刊）誌上に反対論を掲げた。かれは氣骨に富み、「談論風発、行文如流」の人で、その反対論は痛快極まるものであった。大正二年四月号に「金田二部教授は経済上果たして得策なりや」の論文を掲げて京都在職以来の恩人、田中課長に論議をいどんだ。これに対し田中も「金田二部教授の経済上の利益」を発表して応酬した。県学校課長と一小学校長が教育誌上で公然と回を重ねて論議を交えるなど、まさに大正デモクラシー期にふさわしい事実である。

この論争も田中課長の退陣によつて幕を閉じたが、両人の関係はいさざかも傷つくことなく、大正六年、かれがさまとまな業績を残して地元高砂町民の哀惜の中に病死するや、田中は自ら筆をとつてその彰徳碑文を撰書した。まさに君子の争いである。かれの病臥中には時の清野県知事も親しく見舞い、また、町民は町費をもつて住宅を購い、月三〇円の終身手当を贈つた。一小学校長として、けだし一世の傑物といえよう。

六 今閑秀雄（盲教育の健）

明治二十二年、茨城県に生まれ、五歳の時、外傷のため失明。明治四十年、東京盲学校に学ぶかたわら、神田の正則中学校夜間部に通い、暗眼鏡にまじって英、独語、数学などを学んだ。盲人は鍼灸

自己のキリスト教的使命觀に立つて指導した。
昭和八年、同校を辞して東京盲学校長に転じ、翌九年、後進に道を譲つて退職後、日本盲人会長、日本鍼灸マッサージ師会長、文部省学校教育課程審議会専門委員等を歴任したが、昭和二十七年、その愛盲一路の生涯を閉じた。
主な著書に、「鍼灸全書」「経穴考」「鍼法要義」等がある。

七 鶴崎久米（中学校教育の創造者）

安政六年（一八五九）、佐賀藩士の子として生まれ、明治十五年（一八八二）、クラーク博士で有名な札幌農学校を卒業。新渡辺稻造や内村鑑三らと同期生である。

明治二十九年（一八九六）、神戸市葺合村に神戸尋常中学校（現在の県立神戸高校）が設立されると、その初代校長として、三十六歳で着任した。
当時、兵庫県の県立中学校は、姫路中学校一校にすぎず、しかも、小学校就学率が六五パーセント（全国平均六七パーセント）という状態の中で、中学校教育をどのように展開させていくかは重大な事であった。

農学生のかれの脳裏には、風雪にさらされながらもすくすくと育つていく草木の姿があった。しかし、眼前の子どもたちの姿には、いた。

そこから、どのような困難にもうら勝つ精神力をもつた人間をつくることこそ教育の使命であると考えにいたつた。『質素剛健』と『自重自治』の中学教育方針はきまつた。

（『質素剛健』と『自重自治』）



さえ学べばよいとされた時代である。後年の雄活躍の素地はこの時代に培われたのである。

大正二年、東京盲学校師範部卒業と同時に校長の推せんにより、

神戸訓盲院に着冠二十五歳で主任教師として赴任した。当時、訓盲院は始祖、左近允孝の死後、未亡人があとを継いだ苦難の時代であった。翌、大正三年院長となつたが、世は不況の底にあり、この種の施設は篤志家の寄付金のみが頼りであった。かれはこの不安定さを除去し、公機関に移すべく、全国盲学校校長会のリーダーとして当局に対し、熱心に請願を続けた。やがて大正十二年、待望の盲学校及び聾啞学校令が制定公布され、神戸訓盲院も神戸盲学校と改称、大正十四年同市にあった神戸盲学校を合併して、兵庫県立盲学校として念願の県立移転が成り、ここに発展の基礎が確立された。

また、かれは鍼灸治療に対して、従来の経路中心の治療法の欠点を指摘し、「経穴考」を著してその改良にあたり、「刺鍼線」という治療点を案出して鍼灸に独特の天地を創造した。そのほか、数字点字記号、教科書編さんなど多方面にわたって盲教育の革新と進展に尽力した。

二十二年間にわたる同校校長在職中、特に盲生の失明鏡を「盲目に生まれしは、この人の上に神の業を頼われんがためなり」との、

を校訓とする校風の樹立である。中学校をあらゆる意味での鍛錬の場にしようと決心したかれは、積極的な具体策を実践していく。寄宿舎教育もその一つである。かれの教育について、当時の新聞は「神戸中学校は壮士の養成所なり」と評したほどである。こうして軽薄な風潮は一掃され、中学校教育が人間形成にあることが、世人に認められるようになつたのである。

かれは二十七年間、神戸一中の校長として、県下中学校教育の先駆的役割を果たしたのである。

八 水島鏡也（万人を感化した平凡偉大の名校長）

元治元年（一八六四）、豊前中津藩士水島均の長男として生まれる。明治十年父の急死により一家離散し、かれは姫路の伯父富永石州にひきとられる。城東小学校を経て、姫路中学校本科を卒業。明治十七年、兵庫県立神戸商業講習所を卒業後、中津開運社の給費生となり、上京、高等商業学校（後の一橋大学）を明治二十年に卒業、同時に同校の教員を嘱託された。翌二十一年二四歳で府立大阪商業学校（後の大阪市立大学）の校長心得を

拝命した。かれはその

学校の懸案であった学

制改革をなしとげると

明治二十二年卒業界に

とこらが、卒業界に

出て、かつての教え子の情義に厚いことに感じ、教育事業を苦しいひきあわない仕事と思ったことの誤りをさとり、明治二十九年（三歳）、母校の招きをうけて東京高等商業学校教授に就任、商業教育事業こそ自己の使命であるとの自覚にたって献身するようになつた。

明治三十五年、神戸高等商業学校（後の神戸大学）が創設されると、その初代校長に任命され、大正十四年退官まで、その生涯を通じて学生の教育にあたつた。

かれは、商科大学と、商業教育の特異性と歴史性を強く意識し、わが国商業教育樹立の識見と抱負を神戸高商という現場でみごとに実現した先覚者である。すなわち、神戸高商の学制制定と校風樹立に多くの新しい創意が実現された。最高水準の外国语教育、将来の商業大学をめざした予科一年、本科三年の四年制度、卒業すればそのまま東京高商専攻部（二年制）につながることにした。これが、後の神戸大学への布石となつた。また、少壮氣鋭の教授を迎えて、教授一人に学生十人を分属させる研究指導制度（後のゼミナール）を全面的に実施するなど、当時、世人はこれを「水島の学校」「幕合村塾」などと名づけた。

九 野口援太郎（日本のペスタロッチ）

明治元年（一八六八）、福岡県鞍手郡に生まれ、同十七年鞍手郡公立中学校中等科を卒業して、小学校教員をしたが、十八年福岡県尋常師範にはいり、二十二年卒業と同時に同郡直方高等小学校訓導となる。しかし、二十四年、さらに東京高師文科に入学し、二十七

年に卒業、京都府視学、母校福岡師範の教諭、福井師範の教諭兼舎監、さらに東京高師の舎監を歴任し、明治三十四年二月、創設の姫路師範学校長の重責につくこととなつた。三十四歳であった。これより十八年間、兵庫の教育者としての新教育の実践が始まるのである。

このころの師範教育は森有礼の導入したフランス式のもので、すべて軍隊式であった。かれはこれを根本的に改革し、人格尊重の教育、自由自治の学風の樹立、体験・労作の重視、鍛錬主義の徹底、宗教的情操の育成をめざしたのである。学校教育も、寄宿舎生活の指導もその出発点・到着点は、すべてこの五つの教育綱領にあつた。

明治三十八年の久保田文相の視察も、同四十二年の小松原文相の視察も、野口校長の抱負とその実践に大きな関心をもつていていたからである。校長を中心とし、職員生徒が一体となっておし進めつつあつた新しい教育は、文部省の「姫路師範の施設、経営は本邦師範学校の模範である」の表彰のことばによつても推測されよう。

大正八年、姫路師範を去ると同時に、帝国教育会理事として民間教育の統制と向上、女子教員の資質・地位の向上、帝国教育会館の建設など、わが国教育の革新と振興につとめ

野口援太郎



た。

十 囲田五兎（愛と涙の教育者）

慶応三年（一八六七）東京に生まれ、十四歳のとき、大学予備門（後の一高）に入学したが、家庭の事情で中退、明治二十二年九月、帝国文化大学に特約生として入学、ヘルバート教育学の講義を聞き、影響を受ける。

後年、かれが、ゲッケスの「教育史」やフロエリッヒの「科学的教育学」などを翻訳出版したのは、この時代の勉強が大きな力となつてゐる。晩年になつてもドイツ語の原書に親しんだのは有名である。

かれは大学卒業後、福島県尋常中学校、愛媛県尋常中学校、新潟師範学校教諭を経て、明治三十八年十月、兵庫県御影師範学校教務主任に迎えられた。

信念と氣迫の人として、官僚全盛の時代にあって、よく教育の権威を守り、一方、生徒を全面的に信頼する「信頼の教育」に徹している。晩年になつてもドイツ語の原書に親しんだのは有名である。

当時の師範は全寮制だったが組織は軍隊式で五つあった。これが、師範教育を誤らせ、形式主義に陥らせていくことをさとつて、いたかれは、明治四十年、失火

による寄宿舎の全焼を機会に根本的改革に着手した。すなわち、隊組織を自治体組織に、厳格主義を家庭主義に変容させた。かれは、養長の役宅に住み、妻とともに、五二人の寮生をわが子のように愛育した。これは、わが国の師範教育の大きな先駆的改革であつた。その間、県知事よりの再三にわたる中学校長への懇望を退け、万年教頭に甘んじながら、教育者としての意志を貫いたのである。昭和六年三月、かれは二十五年間の御影師範を去るのであるが、その人物は、思想とともに教育界に一つの灯を掲げた人として、教育史書はその業績をたたえている。

十一 及川平治（分団式動的教育の実践者）

明治八年、富城県栗原郡に生まれる。明治四十年、三三歳で明石女子師範教諭兼付属小学校主事となる。

富城尋常師範学校を卒業したが、上京して独学で文部省中等教員検定試験に合格し、教育学の師範学校教員免許状を得た。その間、新しい自由主義教育の意欲的な研究にのり出していた。付属小学校

主事となると、さっそく教育方針三綱を制定

治し、自学補導主義教育平の理論と実践を確立し

川方針をまとめたものが及「分団式動的教育法」

式各科動的教育法》（大正四年）の一冊で、一五版二万五千部を売り尽くし、教育書としては、わが国有史以来の記録となった。

かれは、明治期を支配したヘルバート派の主知的单一教育に対し、能力別の分国式教育が必要であると説いた。それは、デューアイの思想に触発されたものではあったが、かれの内部に可能性としてすでに宿っていたもので、かれの個性的創造的な教育理論と言える。

動的教育とは、児童に知識、習慣、理想を自力で創造させようと/orするもので、分国式方法で機能的な児童本位の教育を行ない、真理そのものよりは、真理の探求法を授けようとする主張である。

その後、大正十五年七月、一年七ヶ月にわたる欧米教育視察の旅をおえて帰国したが、その間、コロンビア大学に入學し、教育測定学、デモンストレーション課程を専攻したかれは、自己の動的教育に確信を深め、さらにそれを發展させるために「新カリキュラム論」を提唱した。昭和四年には、カリキュラム改造全国講習会を開催するなど、昭和十一年三月、二十八年半の付属小学校主事を退職するまで、わが国教育に大きな影響を与えた。

十二 和田法雷（教育給食の開発者）

かれは、明治十八年、石川県金沢市淨泉寺（真宗）に生まれ、石川県立第一中学校から岡山医学専門学校、さらに同校研究室において病理学を専攻し、明治四十二年、現在の塙屋町で医師を開業した。それ以来、垂水地域において、出張診療所あるいは病院を開設經營し、医家としての令名を大いにあげた。

教育、特殊教育、同和教育等、重要課題として教育施策に反映され実績をあげつづる。また、最大の課題であった入試制度もその改革がなされて四年め、さらによりよいものへと検討が加えられる。文化施設においても、県立美術館の設置、図書館の設置準備など、じだいに充実しつつある。

国民総生産から、総福祉へと転換しているわが国の現状とあいまって、兵庫県教育も人間尊重の立場に立った新しい人間性の教育へと第一歩を踏み出している。しかし、兵庫県が教育県として自負するためには、まだまだ多くの未解決の問題が残されている。恵まれぬ地域や階層の人々の教育水準をいかに高めていくか。入試制度にどのような改良を加えるか。文化施設はどうか。社会教育など、それまでの未解決の問題が残されている。

最後に、本稿において、郷土の教育史を人物中心に扱ってきたが、「兵庫県教育史」「兵庫県教育誌」の「兵庫の教育者」「郷土百人の先覚者」などを参考資料とした。また、その業績は兵庫県教育に關係ある部分のみを取りあげており、それが、わが国の教育の流れとどのように関連するかについての叙述にやや欠ける面があること、さらに教科の都合上、他の多くのすぐれた教育者についての叙述を割愛したことをお許し願いたい。そして、この執筆にあたって、「兵庫県教育史」編集主任であった山田正雄氏には、格別の助言を賜わり、深く敬意を表するものである。



かれは医学的臨床を通じて、社会福祉的人間愛の実現をめざした人である。昭和三年、明石郡塙屋尋常小学校の校医をしていたが、不満足な食物条件にある病弱児に会うとき、氏の胸底は医者としての責任感以上の痛恨感に満たされたようである。喜和夫人に命じて栄養食を与えたせたり、親の食物指導にあたらせたりした機会がしばしばあった。このことは喜和夫人にとっても大きな生きがいであった。

こうした夫妻の、学童の健康づくりに対する熱意は、学校を中心とした地域ぐるみの協力を生み、学校給食へと発展するのである。昭和七年九月、文部省は不況による学童の欠食、栄養不良対策として、「学校給食臨時施設方法ニ關スル件」なる訓令を出し、兵庫県も給食奨励にのみきった。和田夫妻の学校給食への情熱はこの客觀情勢によって、さらにもえあがるのである。かれは、たちちに自ら保健部長となり、昭和八年一月一三日付で「学校給食ニ關スル計画」を県へ提出した。こうして、要給食児二八人と欠食児を加え、同年三月一日から、いちはやく給食が開始されたのである。

□ おわりに

兵庫県の教育は、明治以来、先人のみなみならぬ努力によつて、今日の水準に達することができた。しかし、開港場としての神戸を中心として発展してきた教育も、工業の発達とともに、地城差の拡大や生活水準の格差とともに、そのレベルも開きつつあるのが現状である。

幸いにも、県当局はじめ、県民の積極的な姿勢によつて、へき地

人物を中心とした

奈良県教育郷土史



扇 田 耕 作

県花……奈良八重桜

○学制颁布以前の教育

大和は古代国家の地、そこに設立された大社寺は現在に至るまでその隆盛を示し各時代を通じて教学の中心となっていた。近代教育の創始以前は社寺が文教の府であったからである。したがつて大和の教育は社寺を中心として発達してきたのである。

近世になると大和武士は一掃され、大和にも大名時代がおとづれたのでやがて武家は武家としての学校施設がととのい庶民には寺子屋などが設けられ特に江戸中期以降にさかんになった。後期には学者の家塾も開かれた。武家大名の藩校としては戒重藩織田氏の藩校「遷喬館」が元禄九年（一六九六年）に設立されたのが最初のようであり、これは織田氏が芝村に移ってからは芝村藩校として存続した。大和の大藩である郡山藩では、藩主の交替がはげしかったのでつまびらかでないが、柳沢氏が藩主となつてから享保末年（一七三〇年ごろ）に總稽古所が創立され文武両道の藩校となつた。しかし概して大和では天領小藩が分立していたので藩校などの充実したものはなく、士卒も家塾等によつて教養を積むに過ぎなかつたようである。

家塾には儒臣の開校したものなどもあり、またその開設には藩庁へ届出をなさしめた。儒者としては高市郡八木の谷三山（慶應三年（一八六七年）没六十六歳）が家庭をおこして興譲館といい、後高取藩村氏の儒臣となつた。宇智郡五条の森田節斎（明治元年（一八六八年）没五十八歳）も著名である。郡山城下では蘭学、英学の端緒もみられたといふ。

庶民教育の寺子屋は漸次国中の要地や諸寺に開設された。明治初年にかつて寺子屋の開設された箇所の調査がおこなわれたが、幕末から明治初年に至るまでに、奈良町内は不明として除外されているが大和一国で総数三〇八があげられている（日本教育史資料卷八付録）。これには未報告のものもあったことは明らかであり、完全な調査ではないにしても、一町村にして十数か所に及ぶものもあり、かなり普及していたものと見てよい。

こうした文化的な土地柄だけに教育への関心は強く、明治の声を聞くとともにいち早く学校の開設が相次いだ。元年には柳本藩に明倫館、田原本藩の明倫館、小泉藩の修道館、櫛羅藩の藩立学校、同三年には柳生藩の修文館、高取藩の明倫館も開校した。これよりさき元治元年（一八六一年）に十津川郷士が孝明天皇の御旨をうけて文武館（今の十津川高校）を開設したのが注目されるし、民間では奈良で興福寺の僧有志が明治元年三月に宝蔵院を学舎として学校を開いた記録もある。

いよいよ五年に至ると学制頒布が近づいたので私塾の設立許可申請もさかんになり、四月には奈良市中院町極楽院跡と北袋町旧学校跡（旧学校名未詳）に市民有志が『私小学校』をつくり五月一日より開校した。ついで八月に学制頒布があり、それにもとづく改編が行なわれたのである。

○学制頒布後の教育

学制は四民平等の精神を基調とし、小学校教育をもって国民教育の基礎とした。さらに男女ひとしく教育をこうむらしめること

を令したし、生徒にして成業の器量あるものは進学をすすめるし、学費不足の場合には貸与する計画もたてたものである。奈良には寺院が多く校舎にはこと欠かない。六年三月には五〇余校、五月には一六八校、翌七年には三五〇校とうなぎのぼりに小学校がふえたのである。明治八年には三七七校にふえ、校舎は寺院一七二校、廢寺六七校と圧倒的にお寺が多かった。

規模も大きな学校は少なくほどんど生徒八〇人に先生一人、寺子屋に毛のはえた小学校であった。

注目すべきことは、この学校設置に寄せた県民の向学熱であろう。明治七年の学齢人口五万一千人に対し就学者数は二万七千人、就学率は五一・七%で当時の全国平均三一・三%で全国三位、吉野郡という巨大な辺境をかかえながら抜群の就学率をあげたのは、ある意味では驚異的といえよう。さらに大正四年には九%を越えたのである。

次は教師の問題である。師範学校は明治六年には東京・大阪・仙台にあるだけ、したがって卒業者もごく少數だった。奈良県では師卒の訓導は明治八年にわずか一三人、残り六八一人が助教だったという。そこで政府は各府県に教員養成の学校をつくるよう命じ、同七年小学校教員伝授所として寧樂書院が誕生した（校舎は今の大正四年には五条小学校教員伝授所の一部）。六か月の速成教育で一五〇人を送り出した。翌八年に寧樂書院は師範学校に昇格した。これより先字智郡五条町旧代官跡に支校として設けられていた五条小学校教員伝習所も五条師範学校として昇格、二校で教員養成に当たった。明治十二年独立した郡山中学校も誕生し、初等中等教育とも整

備されていった。そして昭和二十二年太平洋戦争の敗戦とともに画期的な転機を迎え、六・三・三制の新教育のスタートとなる。

現在小学校二六七校、中学校八九校、高校二四校、中学卒業生の高校進学率は七八・七%で全国十二、三位。明治初年に県民が示した教育文化への情熱は、いまに継承され、全国有数の教育県に進展を見たのである。

以上奈良県教育百年の概要を述べたのであるが以下奈良県教育が今日の盛況を見るに至るまでそのことに尽した主要な人物を中心その業績を記してみよう。

○谷 三山（家塾開いて志士養成、一重苦克服した大学者）

享和二年（一八〇二年）奈良県八木（今の橿原市）に生まれた。家は近隣では屈指の富を擁し生まれながらにして名族の血を享け、その生得の資質においてきわめてすぐれたものがあったようである。十一歳の時に耳をわざらいほとんど聾となり、数年後全聾

となつた。十一歳までは本も読めだし大変賢く、ものおぼえもよく両親や兄から将来をたのしまれていた。はじめ小説を読んでいたが兄から正史を読みと激励されて方向転換した。僕のときはまだこれを賢人君子となすに足らずといえども亦これを逸群慷慨の士といわざるべからず。」と二十一歳にしてこういう氣概と自信をもつていた。しかし多病であったので両親から多くの書物を買ってもらい全くの独学と身の不自由で文字通り苦学であった。三十歳前後で京都の大学者、猪飼敬所から「学博くして雑ならず、粹にして正し」と大いにほめられている。

興譲館という塾を開くと各地から遠近を問わず教えをこい多くの学者志士を養成した。また幕府からの下問によつて堂々と攘夷論「靖海芻言」を書いていた。三山こそ明治維新の隠れた大立役者であったのである。しかし三山は慶應三年（一八六七年）王政復古の大号令が焼拂されて三日目十二月十一日六十六歳で没したのである。

○森田節斎（門下に奇傑の士輩出、天珠組等兵蔭の功労者）

勤皇儒者森田節斎は奈良県五条の人で南朝方桜井四郎の裔である。はやくより京都に上り（一八二五年十五歳）猪飼敬所の門に入り業を習い頼山陽に師事した（一八二七年十七歳）。山陽はその奇方に舌を巻き、その筆力師に勝ると激賞したといつ。その後江戸に遊学（一八二九年十九歳）昌平齋に入り古賀洞庵に従学、後四国に渡り（一八三八年二十八歳）伊予の近藤篤山に経術を質し広く天下の儒者とも交つた。當時節斎を六経語孟、千言万語に



谷 三山

通じた天下に並ぶものなき大学者なりと評されたのである。

海防の説教なる、五条にあって門生乾十郎に十津川郷農兵の訓練をさせ、いたん縦縫に備え、尊攘の気風を盛に鼓吹せしめた。長州の士吉田松蔭がその門をたいたのはそのころである。節斎を尋ね天下の志士多く往来し、五条はさながら勤皇の地たる様を呈したといふ。

しかしその生涯は五条の地に安住せず四方（大和・京都・播磨・備州・伊予・讃岐・淡路）を遊歴。各地に塾を開いて教授した。その奇節文章たる大義名分は扼腕痛憤、声涙ともに下さぬ者ではなく、志士達を鼓舞せしめ幕府をして大いに震駭せしめたといふ。

春秋の筆法をもってすればもし節斎なかりせば吉田松蔭もなく、その門生達の討幕運動もない。

また天珠組大和の拳義もない、ひいては明治維新の実現はないとも極論されるくらい。節斎こそ維新の大指導者であったわけである。

それゆえ常に幕吏の圧迫をうけ、ついに慶應元年（一八六五年、五十五歳）備中倉敷より紀州に亡命荒見の南朝方豪族北家の庇護を受け、この地に惟を垂れたのである。明治元年（一八六八年、五十八歳）王政復古の維新の夜明けをながめながら淋しき草命家の生涯を閉じたのである。

○土倉庄三郎（偉大な造林家、幾多の公益、福祉、慈善、育英の事業完遂）



明治十年に制定された川上村小学校のハイカラな制服のデッサン

房具などを全生徒に寄贈した。小学校として開校したのは奈良県では最初である。その後明治十年（一八七七年）からは、小学生全部にそろいの制服を寄贈した。その制服は今なお大滝の竜泉寺が土倉家から持領の品として秘蔵している。

上衣の表は手織紺木綿、裏は白の厚地、河内木綿、型は背広型折襟二つボタン、後は縫割フロック型、ズボンの表は紺木綿、裏は天竺木綿、形は細長型である。

親たちはみんななるべく大きいのを所望したので上衣に肩上げをしたり、ズボンにいたっては股の所膝の所で二段ぐらいいの縫上げをして着させていたそうである。裏闇にして正確ではないが、明治十二年（一八七九年）に全校生徒にそろいの制服を着させた。

村の小学校は日本中で川上村大滝小学校ただ一つかも知れない。

また明治十三年ごろ（一八八〇年）から新島襄と親交あり、同志社大学設立計画に大きな力となつた。庄三郎が新島を徹底的に

天保十一年（一八四〇年）吉野郡川上村大滝に生まれた。代々林業面に卓抜した識見と技術をもつて近畿においても屈指の富を擁する家であった。七歳にして川上村人知の上村勇造師に寄宿入門し手賛、読書、算盤を学び十歳のとき増口の是助師について諸礼、達曲、生花などを習得。十六歳にして父に代わって家業および公務（大滝総代と材木方総代）についたのである。じ來水路開発、育苗、造林に大いに活躍し、吉野林業全書（土倉式植林法を詳述）の刊行、山林視察のため全国を旅行して植林指導をなすなど事業である林業面では我が國造林界の指導者として、また吉野林業中興の祖としてその功績まさに絶大であったことは誰知らぬ者はないが、教育面においてもまた顕著な業績を残したのである。すなはち明治五年（一八七二年）、庄三郎三十三歳のとき、わが國に義務教育制度が発布された。この学制は、主にフランスの教育制度を模範にしたもので、当初の政府計画では、全国に三七六年の小学校が誕生する予定であった。

世は御一新になって、これからは士族の平民も日本人は全部平等になったのだから、歐米人に負けない国民を作るために、ともかく子どもの教育をしなければならないと、フランスの教育制度をうのみにして政府が大号令をかけたわけであった。しかし地方制度が完全でないために小学校の開校はまちまちで、全国のほとんどは寺子屋に新しく看板だけをかけたものにすぎなかつた。

大滝に寺子屋がなかつたせいもあるが、庄三郎はいち早く小学校をつくり、建物は村の地蔵堂を改築した。そして村内の子どもたちに入学するようすすめ、政府が発刊した小学校読本のほか文

志援した理由は、「余が今私立大学をおこす所以のものは一方より云えは日本國を外国の手に渡さざらんがためのみ、即ち眞に生命あり活氣あり真理を愛し自由を愛し徳義を重んじ、我が日本國のためにその生命を擲つて働くところの政治家、文學者、事業家、宗教家を養成し以て我が日本の独立を益々堅固ならしめん。」といふ新島の愛國精神を基盤とした教育にかけた情熱に彼自身の理想を見いだし深く共鳴するところがあつたためと思われる。

明治十五年（一八八二年）庄三郎はまた川上村西河に私学校芳水館を開校した。はじめの三年間、長男の教育のために屋敷の隣接地に小さなものを建てて、漢字と武道の教師を招聘して近郷の青少年にも受講させていたが、聞き伝えて遠方からの申込みが多く、とうてい収容しきれなくなつた。そのころ長男はすでに大阪の藤沢岳の泊園書院に入学していたが、庄三郎は今でいう辺地教育の必要を感じて郷里の青少年のために私学校を開校したのである。私立中学校としては全国でも早設のものであった。川上村西河、この吉野川に面した景勝の地に、土地を購入して正面建物の二階は講堂、階下は各教室、ほかに寄宿舎、教師住宅などがある。庄三郎は後になってこの建物に三千円の経営費を添えて川上村に寄贈した。現在の川上村第一小学校の前身である。

また明治二十九年（一八九六年）日本女子大学の設置に協力、後には同校の評議員に推されている。

庄三郎はまた愛郷精神が特に熾烈で松方正義首相から山林局長

就任の交渉を受けたときもつゝに川上村を離れなかつた。還暦のころ山県有朋公から「樹喜王」の号を贈られ幾多の公益、福祉、慈善、育英などの事業を完遂されたのである。

○越智宣哲（私財を投じて育英事業）

慶應三年（一八六八年）天理市田井庄に生まれる。幼時嚴肅な家訓の陶化を受け、長じて京都三國幽眠、本県山下松菊、西谷絅庵らに学び弱冠にしてさらに経学の蘊藏をきわめるため大阪泊園書院藤沢南岳の門にはいり研鑽六年を重ねた。明治二十六年山辺郡丹波市町（今の天理市）に正氣書院を創設、のち書院を奈良市小西町に移転、院内に聖廟を建てて孔子を祀り、菅原二公を配享して毎年祭奠を行ない、もっぱら儒教の本旨に則り育英事業を經營した。

昭和五年邸宅、塾舎その他私財を投じて正氣書院を財團法人と



越智宣哲



藤井高蔵

藤井ショウ

筆として氣骨ある論説を発表し記者間においても重きをなしていった。また政友会に所属して村会議員、県会議員として地方政治に直

接参加して活躍したのは三十歳前後の青年時代であった。

そのころから学校教育に大きな関心を寄せ、奈良の繁栄を学校と病院の建設にありと着眼し、妻ショウならびに幾多の有力者の支援と協力を得て私立育英学園の創設にとりかかったのである。

学園が今日の整備を見るに至るまでには幾多の苦境障害であつたのがあるが、一人ともにたくましいまでの若々しい精神の燃焼力とそしてキリストの教えに支えられた愛の心の実践力で乗り越え奈良育英学校は年とともに発展を続けていったのである（詳細は紙面の都合で省略する——育英学園五十年の歩み参照）。

しかし高蔵は大正十三年（一九二四年）不幸にも大患にかかり志業まだ完遂できないものの多いのを歎きながら女学校建設事業半途で他界され、一切をショウが引き継ぎ、昭和三年自ら校長の職についてその発展に心血を注いだ。時には経営が極度の困難に陥り何度も学校経営をなげうとうとさえ思ったこともあつたがその都度学校を捨てるどころか以前にもまさる熱意と努力を傾げて学校をもり立てるべく精進を重ねつけた。このあたりにショウの性格がうかがえるのである。

かくして奈良育英学校は奈良育英高等女学校、奈良育英学園と名を改め、設立者も個人経営の学校から財團法人へ、そしてさらに学校法人へと変転を重ねた。高蔵がその業を開始した時にくらべ、その外觀も内容も著しく変容を遂げ大きな発展を見ている。最近県下にも私立学校が多く出現したが、本校のようく苦闘の蓄積の上に整備され総合学園（幼稚園から高等学校まで）への発展を見るに至った例はまことに特異なものといふべきだらう。

しその事業の一として正氣書院商業学校を経営、自ら財團代表、商業学校長兼教諭として中等教育に尽瘁されたのである。校務多忙の身をもつて県下各地の学校、教育界、青年団その他各種団体および京都、大阪地方の講演と招へいされること三十有五年翁が薰陶をこうむるもの三千数百人、県下教育界に就職するもの二百六十余名その他の政治家、実業家、宗教家など各方面に活躍し、翁が国家社会なかんずく教育界への貢献は偉大にして幾回かその功労は表彰の栄をうけている。

翁はその該博な知識とともに数多の著作を有し、主なるものでも、三字訓、国民給式、中庸異撰、大學異撰、華中自述、南遊篇、三敬銘など三六種にのぼっている。いずれも忠孝を本とし國体顕彰に努めたもので三字訓、国民給式は教科書として正氣商業で使用し、また三敬銘（敬身・敬学・敬事）は同校の校訓綱領となつている。

翁は聖教維持の唱導に、育英の薰陶に、著述に、講演に、学校経営に畢生の努力を擧げ斯道に勵勵されたのである。

昭和五年新校舎に移転し、現在白藤学園として翁の教育精神を継承ますます発展を続けている。

○藤井高蔵と妻ショウ（育英事業にたくましい精神力、実戦力

を發揮）

○木下竹次（合科教育主義で全国的に活躍）

明治末期に出発した自由教育運動は、大正期にはいつてますますその激しさを加えた。日本の初等教育史上でこの時期ほどははだしく教育運動が展開された時期はないと言つても言い過ぎではない。この時期の教育運動の背景となつたものは、民主主義の発展であり、教育思潮としてはデーライなどの思想の影響が大きかった。だから当時の教育運動には、教育の国家統制に對して批判的であること、子どもの個性を尊重すること、児童中心主義であること、自学主義であることなどの共通点があつた。谷本富の自學主義、樋口勘次郎の統合主義運動、明石付属小学校、東京成蹊小学校等での実践が生んだ自由教育の風潮はたちまち全国の官公私立の学校を風靡した。

このような当時に「奈良の学習」として著名な木下竹次は、大正八年（一九一九年）奈良女子高等師範学校付属小学校（今の奈良女子大学文学部付属小学校）主事に就任され、じ來学習即生活機械的な分科学習を排して渾一的に生活を把握せしめる合科學習法を主張した。合科學習は大正九年（一九二〇年）以来奈良女子高等師範学校付属小学校（主事木下竹次先生）において実践されたが、これは多大の反響をよんで奈良は自由教育の中心地のようになつたのである。

その主張は当時この学校で開催された講習会や研究会で公開され、また機関雑誌や著書等によつて広く全国に紹介されたのである。

○奈良県男・女両師範学校付属小学校の教育概要と活動

（長年県下小学校教育振興に指導性を發揮）

第四代校長川島庄一郎氏の言をまつまでもなく付属小学校は長年にわたり地方小学校との連絡をはかりながら教育教授上に闘つて、共同的研究の機関（初等教育研究会）を設け互いにその成果を開示し奈良県教育の振興に多大の貢献をして来た事は特筆しなければならない。すなわち

・明治時代においては
　　歐米の自然科学的方法原理による人性の心理的自然の方面を重視した教育思潮やこれに対し国粹主義教育も起つて二者は明治思想界の渾沌にも比すべく歸一するところを知らぬ情勢にあつた。この時にわが國教育の大本としてまた不動の統一原理として賜わつたのが教育勅語である。付属小学校はその趣旨を奉し修学の理徳を明確にした。その後ヘルバート教育思想が普及し国内の教育を風靡するの概があつたのである。明治三十年ごろはこの教育思潮の功績は大なるものがあつたがその徹底的普及は段階教授の無批判的固定化を招來することとなつたのである。付属校も教授訓練の各方面にわたつて大いに形成化した弊を認め、以後は児童の本性にかえり見ていたずらなる形式の打破に努め種々の発表会、団体生活訓練に必要な諸施設を設けて県下教育にその指導性を發揮したのである。

・大正時代においては

　　この時代にあらわれた教育主義思潮はそこなる多かつた。すなわち静より動へ体験へという勤労主義作業主義労作教育、形式より実質へ、理念的より経験的へという自由主義教育、偏知の教育より情意尊重の教育の一つとして芸術教育、国家公民的情意を陶冶しようとする公民教育等々多様をきわめたのである。この時にあたつて付属校は採長縮短常に批判的実践的態度を失わぬ堅実な教育精神を培いながら県下の教育をリードしていたのである。

・昭和時代においては

　　文化教育学説の研究がほぼその形態を整えたのは大正の末期で

　　あつたが、力強い実践原理としての活動を見るに至つたのは昭和にはいつてから的事である。付属が創立以来努めてきた不偏調和の教育態度がここに至つてそのまま力強い体系的説明を得、多年の教育成績に対し、より力強い自覺を加えて深化展開を遂げることとなつた。当時の主事が熱と信念をもつて自ら称して唱導した体認教育はこのよき思想の人格化とも言はべく、付属校の教育精神はいよいよ明確な形態を整え県下教育を動かすところ大きなものがあつた。

　　じ來戦中戦後を通じて多少の変移はあつたがよく創立以来各教育思潮を吸収消化してその深化拡充につとめ一貫した教育方針のもとに実践をかさね県下教育の指導的役割を果たされて来たのである。

　　以上大正昭和を通じて県下小学校と共同研究（初等教育研究会）の回を重ねること約八〇回に及びますます堅実な発展を見ることのできるのは奈良県教育振興の上からも喜ばしいことである。しかし戦後教育委員会制度の発足により学校教育指導の主管課が教育委員会にできたので付属校と県下小・中学校との連絡、研究も以前に比して疎遠になつたことはいなめない。

○辻本勝巳（号史邑）（書道の普及振興・学校習字教育の革新に献身奮闘）

　　辻本史邑氏は明治二十八年五月（一八九五年）歴史もゆかしい磯城の都の跡に生まれた。近くに笠縫邑の靈地があり、史邑の号の生まれたゆえんである。ここに先生の足跡の概要を記してみた

6

大正四年（一九一五年）奈良県師範学校

学校訓導となられたことによりいかに秀才であったかは申すまで
もないが、在学当時から晝に志し、日曜ごとに大阪に在住の日下
部鳴鶴の高弟、桑山兼山に師事して非常に熱心に研究された。桑
山兼山は間もなく逝去され、その後東京の近藤雪竹および鳴鶴先
生に師事されたのである。間もなく大正七年（一九一八年）文檢
に合格され兼教諭となられた。

慈惠興立泰風中學校教諭題

音楽学校に在籍時は自由教育の盛んな時代であった。唱歌では音楽教育、国画では自由画(クレヨンがはじめてできた)等生といつた非常に新し味のある創作創造教育を提倡された。そのような風潮下に先生は書き方教育についてもペン習字教育を始められ、吉田石版印刷屋で「ペン習字手本」という小冊子を作られ吹聴さ

つと三年経過して学校の基礎もでき、書道生活もいよいよ繁忙をきわめるようになったので両頭を追うのも良心が許されぬから意を決して学校を退職し書道に専念された。しかしこの数年間の生活は大変無理されたようである。休み中一日として自適することなく地方支部の指導講習に（春、夏、冬の休みは講習で一日のすきもなく）次から次へと全国を行脚された。しかも昼は講習、夜は揮毫（うきひ）といううぐいして休養のない激務であった。しかもこの間昭和新撰書法帖大綱（全三六冊）の刊行、千字文の出版、中等学校教科書等々矢継ぎばやに出版、実に精力的に活躍され病氣のため休養をとらねばならないことさえあったほどである。

実に現われている。続いて二、三年経て日本百人一説を出版（昭和十六年（一九四二年））、条幅手本（上、下）中等条幅手本（上、下）少年条幅手本（上、中）鑑賞揮毫書範を出版されたのである。精魂込めての昭和新撰碑法帖大鏡は昭和十四年（一九四〇年）三六冊で完結されたが、それ以上の昭和法帖大系はまだ中途であった。事変はますます苛烈になり、物は不自由になる。その中を急いで十巻まずまず完結された。紙の入手もなかなか容易なことではない書鑑の經營は尋常人ではできなくなつて来たので資力もあり出版界の大御所である駿々堂に依頼されてしまった。一方大坂の本拠寧樂堂もいよいよ閉鎖して引揚げざるを得なくなつてここに先生の抱負は戦争のため万事一頓挫してしまつたのである。事変集中集帖より明清をやりさらに木蘭に着目し、楷は樂毅論宣示表などの晉の細楷の拡大を試みたり戦後余冬心をものし、あれやこれやと横索して最後に自己を大成しようともくろんでおられたのであるうが完成せずして昭和三十二年（一九五七年）忽焉として逝かれ惜しみても余りありといふべきである。

伝統を創る者は常に偉大である。わが奈良に書の伝統を作られたのは先生であった。また門下には多くの書家が輩出し全国的にも著名な人が多く現在教育界の第一線で活躍されている。また奈良県および県教育委員会、奈良市および市教育委員会の四官厅主催の日本学書展（学生、生徒、児童の日展）ともいうべき普及発展を見ている）は実に先生の残された業績中の一例である。

参考文献

奈良県教育八十年史

(奈良県教育委員会総務課主事)

一方劉石庵の研究、王鐸の研究と明清に下られ真贋により研究を深められ先生の書風は一転した。これはかの百品展の作品に如

れたもので、これが先生の出版物の最初である。続いて、樂志論（毛筆楷書手本）を出されたが、書道上の手本として今までこれが矯矯である。大正十三年（一九二四年）秋も終わり方書道をさらり普及せしむるには、大樂向きする書道雑誌の必要性を痛感され、かねてからの拘負「日本一」の書家」「おれの書風で日本全国塗りつぶすのだ」の実現達成に邁進された。すなわち翌十四年（一九二五年）単身上京して井原雲涯、近藤雪竹、比田井天来、尾上紫舟各大先生方を歴訪して御支援をこい、いろいろ出版の参考書を拝借して帰寧された。そうこうして同年三月「書鑑」創刊号（一〇〇部を刷つ）これがこのまゝの出で、二年、三四年（一九二二年、一九二三年）は、

人物を中心とした

和歌山県教育郷土史



中村元治

県木…うばめがし

一 旧藩時代の教育

徳川頼宣と父母状

一六一九年（元和五年）八月十三日、徳川家康の第十子、頼宣が、紀州に伊勢の一部を加えて、五十五万五千石の領主として、若山城へはいった。これが紀州徳川家の始祖である。

頼宣（おくり名して南龍公、室は加藤清正女瑠林院）は、季梅溪、那波活所、永田喜斎、荒川景元らの儒官を近侍させ、詩文を唱和したり、国政にも参画させた。また、産業を奨励して開墾や水利の改良につとめ、神仏を崇敬させて領内の安定をはかり、海辺の武備を強化するなどかずかずの業績をあげた。

一六六〇年（万治三年）頼宣五十九歳の正月に、一文を草し、季梅溪に命じて淨書させ、領民に教えさせたのが「父母状」（写真）である。

これは、領内熊野山中の住民で、その親を殺して捕えられたが、他人の親はともかく自分の親を殺して何が悪いといって少しも後悔することがない、というのをきいて、かかる不心得者のあるのはわが罪なりとして、起草したものといわれている。

これは「父母に孝行に、法度を守り、へりくだり、奢らざして面々家職を勤め、正直を本とすること誰も存じたる事なれども、弥能相心得候様に常に下へ教可申聞者也。」という簡単なものである。

内容は簡潔で、一見平凡なものであるが、各戸に掲げさせたり、墨帖として習字の手本とするうちに、領民のよく暗唱する

父母之名

ころとなって、ながく紀州人の生活綱領としてその胸にしみついていたものである。今日の和歌山県人に

教が宝永二年五月十四日に、四代藩主頼職が同じく九月八日に、相ついで死亡したため、二十二歳で五代藩主となつた。吉宗は、一七一六年（享保一年）将軍家継の死によつて、八代将軍になるまで、紀州藩主としての十二年間の治績にはまことに大きいものがある。

國すると同時に、まず牢獄の改造をおこなって、大いに領民を畏怖させたといわれているが、彼の治世四十九年間には、藩の基礎が確立して國力が充実し、晩年の一六六六年(寛文六年)には、牢獄には一人の囚人も見られなくなつたといわれている。

五代藩主吉宗は、二代藩主光貞の第四子として、一六八四年

のち、講義所を改めて講堂とし、儒者、物説、教授の三職を設け、儒官を増加して充実をはかったが、吉宗入幕の後は漸次衰微したようである。

一七八九年（寛政元年）徳川治寶（はるとみ）が十代目藩主となつた。治寶は衰微した講堂の再建をはかるため、改修増築をおこなつて、これを学習館と命名した。

修学させるることとし、学習館規則を定めた。これによつて、舊学は面目を一新し、学習館に学ぶ学生は多いときは六〇〇名、少ない時でも二〇〇名を下らなかつたといわれてゐる。

また、一七九一年（寛政四年）には侍医竹田慶安、近藤健安らの建議によつて、本町三丁目に医学館を開設した。

医学館はのちに雑賀町に移転し、貧民施薬の事業もおこないながら明治維新によよんでいる。

当時は、十一代将軍家斉の時代で、松平定信の寛政改革がおこなわれ、幕政をひきしめたが、定信の引退後は水野忠邦が老中となつて権勢を振るうよくなつてからは政治綱紀が著しく乱れた。

通鑑

和歌山国学所は一八五六年（安政三年）に開設され、加納諸平、前田水穂らが講師にあつた。また、岡山に新築された文武場内に蘭学所があつて蘭学の教授がおこなわれていた。しかし、当時の十三代慶福は幼年のため江戸にあつて、庶政施

しかし、一方商品経済の発展はめざましく、いわゆる江戸人文化の爛熟期である文化・文政時代も現出した。

紀州徳川藩は、始祖頼宣以来質実剛健の氣風のもとに、西海の鎮護を自ら任じてきただものであるが、治癡にいたって、将軍家斉

の第二十五三章(一一九頁)、第二十四、二三三章(一一九頁)、二二二章(一一九頁)。

二代にわたって養子縁組をしたため、藩の制度をことごとく江戸風に改めることになった。城下の土屋敷も長屋門、海風壁の壮麗なものに改めさせ、また、一八三二年(天保三年)には、江戸城本殿を横した御殿の造営をおこなって、奢侈費沢のほどは追想の及ばざるところ、といわれている。

しかし彼にさかんに文教施策を実施して、新しい時代の学問を奨励させたのである。

また、試験賞典法を定め、「御試の上其才に応じて御擧用有之恩旨に候。御目見以下たりとも俊秀の者は相応に御擧用可有之事に候間、存其旨可互相励之事」と令して、門閥、階級を尊んだ當時としては異例の措置をとり、勉学を奨励したものである。

設はすべて江戸を優先したため、国学師家の本居家は江戸に召されており、蘭学の竹内玄同、同幹庵、佐藤實齋、丸山健齋、郭延雪等は江戸蘭学所におり、和歌山における国学、蘭学はあまり振わなかつたようである。

藩の学制改革と津田出

慶応年間は、和歌山藩にとってみぞうの苦難の時代であった。

慶応元年の第二回長州征伐には第十四代茂承（もちつぐ）が先鋒総督として出陣したが大打撃を受けた。また、のちに鳥羽伏見の戦における幕府の敗兵が和歌山城になだれ込んだため、勅命により速かに幕軍を討伐して誠意のひれきを迫られ、さらに軍資金十五万両の上納を命ぜられた。

財政の窮乏はその極に達し、住民は物価の高騰と凶作に苦しめられ、全国的にも打ちこわし、世直し一揆が頂点をきわめたのがこの時代である。

一八六六年（慶応二年）十月、茂承は津田出を、国政改革制度取調總裁に命じ、藩政改革の意見を求めた。

津田出はもと大政所付であった津田三郎右衛門の長子で又太郎といい、病身のため家督を弟（津田正臣）のち初代和歌山県知事）にゆずり、江戸に出て蘭学修業のち、和歌山に帰り、政治経済の研究をしていたが、藩政の窮乏に際し、抜擢されて御小姓となり顧問となつた。

茂承は津田出の作成した「御改政御趣法概略表」によって、改革をはからうとしたが、藩内諸派の意見が調整できず、改革党に属する奥右筆組頭田中善蔵が登城途上斬殺される事件もあり、

津田の總裁を免じ、改革は中止せざるをえなかつた。

一八六八年（明治元年）にいたつて茂承は再び津田出を登用して執政とし、藩政改革の施行をはかった。翌二年一月十五日、津田出の案にもとづいて大改革をおこない、軍政と学制の改革を行つた。

兵制は従来の士卒兵の制を廢し、士農工商から裏る法を定めたが、これは後の中央政府の徵兵制の前駆となつた。さらに、軍政改革だけでなく、全国にさきがけて文武官吏の選任、五人組の編成にいたるまで、士農工商の区別を廢した。この改革は、人材登用のみちをひらき、住居、營業の自由を保障したもので、藩政改革に苦しむ各藩の参考となるところが多く、大いに紀州藩の名をあげたものである。

浜口梧陵（後述）も抜てきされて勘定奉行となり、さらに大広間席学習館知事となつて学習館を總裁することになったのは、このときである。学習館内には、国学、漢学、洋学の三寮と秘書寮をおき、生徒寄宿舎も館内に移した。

「学習館生徒貴賤を論ぜず、學事に就ては四民同胞学科等級の順序を以て次第を相立候村、農工商の輩入学制度面々は申出候様可致事」として、従来、士分の子弟のみに限定していたのを、はじめて農工商の子弟の入学を許可することになったのである。

また、功利の学として卑しまれ、徳教に貴があるといわれていた徂徠学を採用し、「字句文詞の末に走らず活達宏大の見を広め、経國の才を育し、政理に達し候様との御趣意よくよく実学を受用せしめ、研究可致との御事候」とし、時代の進展に即した実学的傾向が、強く前面に出でてゐることが伺われるのである。

ついで、十二月にいたり学習館は單に学校と改称し、城内一の丸に移転したが、間もなく洋学寮を廢止した。これにより先に、藩は学習館に四民の入学を許可するとともに、さらに広く人材の養成をはかるため、各地方に郷学所を開設したが、一八七一年（明治四年）七月の廢藩置県後廢止した。翌明治五年一月には、旧藩学校はすべて廢止され、これに代わって岡山兵学寮跡に県立学校「県学」を設置したが、同年七月の学制発布によつて廢止され、ここに五代藩主徳川吉宗以来一五〇年余の歴史をもつ紀州藩学はその幕をとじた。

一一 浜口梧陵と耐久社

おいたち

浜口梧陵は、一八一〇年（文政三年）和歌山県有田郡広村（現広川町）に生まれ、十一歳のとき醤油醸造業の浜口本家の養嗣子となつた。

浜口家は、元禄年間から、下總国銚子港に出店していたが、梧陵は、本家にはいるとすぐ銚子における家業を見習つたため、広村を出発したが、当時紀州と銚子の中継点となつていた日本橋小綱町の浜口家にしばらく足をとどめ、そこから当時三、四日の日程である銚子に出向いてゐる。

このように、店務をみるため、紀州一江戸一銚子を巡回する間にも多くのすぐれた人物と交遊する機会をもつことができたのである。

彼は、元服後、間もなく剣法のけいことをはじめたが、中でも、

佐久間象山、勝海舟との交遊

三宅良齋によつて、広く世界をながめうる視野を開かれた梧陵は、郷里柄原村出身の先輩で勤王家として知られていた菊池海莊の紹介によつて、吳服町において砲術指南をしていた佐久間象



山をたずねたのは一八五〇年（嘉永三年）である。しかし、象山に砲術を学んだかどうかについてははまびらかではない。

いっぽう、勝海舟は、このころ貧しい生活の中で蘭学、特に兵学、砲術、航海術などの研究中で、日本橋の書店で立ち読みしながら読書欲を満していた。梧陵は、海舟を後援していた淡田某の紹介によって海舟と相知ることになったのもこのころである。

「昨夜のお手書到着仕候。頃日は御繁務の由さぞさぞと推察仕候、申上候洋書の儀御配慮下され大に力を得申候。実は少々急ぎ候故無縁の事とあきらめ候處に御座候。この者は小生剣法の弟子在宅、御閑も候はば必ず御来臨奉侍候。BOOKの義について色々都合宜儀御座候。御厚情を以て必要な書入手に相成申候様成行申候。委細は拝顔の節お詫申上げるべく、必らず御賞臨奉侍候」

これは、海舟が、梧陵に洋書の購入のため金子借用の快諾をえて、使いの者にもたせた手紙である。

これ以後も、両者の交遊は長く続いた。一八六〇年（万延元年）、海舟が威臨丸の艦長として渡米するにあたり、かねてから海外渡航の志をもつ梧陵の同行を勧誘するため、わざわざ加太（現和歌山市）まできていたのを見るにいかに両者の交遊が深かつたかを知ることができる。

郷里広村で連絡を受けた梧陵は、ただちに八丁櫓をとばして加太に急行したが、郷里における要務のため遂に同行を断念した。

なお、梧陵がようやく三十年來の宿願を果たそうとして、シテ

男役の間にあい候様、日々いとなみの間むだ遊びせず、明暮油断なく相はげみ、日本氣性の勝れたるところ、夷人にかがやかすため今日急度申合ものなり。」

彼は、このこととどまらず、翌年（一八五二年）郷里の青少年教育振興のため、同郷の有力者である浜口東江、岩崎明岳などとともに、広村田町にけい古場を開き、村内の青年子弟の教育に着手した。これは後の耐久社で、彼にとって最初の教育事業となつた。

そこで、剣法は、田辺蕃士沢直記に、知徳の開発には、広八幡の官司佐々木久馬之助に依頼して、夜学のけいこをはじめた。しかしながら養父保平の死亡、山積した江戸店の要務などにより耐久社の運営に専念することができず、一時これを他人の手にゆだねることになった。

一八六六年（慶応二年）になって、梧陵はけい古場の衰微を見るにのびず、増築してこれを耐久社と名づけた。さらに一八七〇年（明治三年）には、耐久社の校舎を改築し、鑿剣指南田中八十吉、中村嘉右衛門を招き、安樂寺の住職浜口松堵にもっぱら教育の任にあたらせるとともに社則を定めて子弟教育の実をあげた。

耐久社はその後、多くの人材を養成しながら、明治二十五年に耐久学舎と改称し、漢学、英学、数学等の普通教育をおこなうことになり、明治三十九年には校舎を西の浜（現湯浅町）に新築した。明治四十一年には、さきに改正された中学校令により私立耐久中学校と改称した。耐久中学校はその後（大正九年）県立耐久中学校となり、昭和二十二年には県立耐久高等学校となつて今日

一九〇二年（明治三十七年）彼が六十五歳のときであった。海舟は、梧陵の出發にあたり、秘蔵の雜賃孫市（大阪夏の陣で勇名をはせた紀州随一の英雄）の用いた槍の穗先を贈ってその行を祝した。しかし、不幸にして翌年ニューヨークに病み、この地において客死した。

耐久社の創設

江戸にあって、佐久間象山と交遊し、勝海舟に学ぶなど進歩的な学者と接觸し、広く海外の状況と我が国の立場について学ぶところの多かった梧陵は、一八五一年（嘉永五年）三十一歳のとき故郷広村に帰った。

当時は、黒船の来航ひんぱんの時代であったが、梧陵は、この情勢に黙していることができず、広村崇義團をおこして、外国船の渡来とその目的を知らせ、國の危機を開拓するための決意をのべ、郷党の自覺をうながした。

つぎにかかるのはその発会式における趣意書の一部である。

「今月今日我氏神と崇奉する八幡宮の大広前において、正義勇猛の男児を集め盟を立て、人數賦りを定めおくは、決して物好きに軍の真似をいたさずあらず、近年異國船渡来いたし候本心は、我日本國をねらいとて、我物にせんとのたくみなり。もし我日本の土地を少しにても夷人等にとられては日本の大恥ゆえ天子様には殊の外御心配被遊、付ては國の守様にも深く御苦勞に思召され候事也……（中略）……万の節は居村を守り、村内足弱に至る迄一人たりとも凶事あつてはすまぬ事なり。又心ばかり堅まりても、用前に立たぬ故、銘々鉄砲打習い、棒つかい等このひえ、きつと

にいたっている。なお、耐久社の建物は現在、広川町立耐久中学校に移転され、いままお有田地方青少年教育の魂の殿堂となつている。

共立学舎の設立と福沢諭吉

明治二年一月、藩学学習館の總裁となり、藩学の近代化に努力を継けてきた梧陵は、これで満足することなく、外國語の普及をはかるため、英語学校設立の計画をはじめた。

勝海舟は、梧陵の学問について「広く群書に涉り、喜こんで徂徠の学を治む」と評しているが、平素から信奉している清世利民思想のものに、英語学校設置の構想も、空論を排し、時代の変転に即した彼の実学尊重の精神によつたものである。

英語学校の設立について梧陵は、かねて福沢諭吉について英学を学び、その自由主義を信奉している松山棟庵にはかると、棟庵は「英学の普及は望むところであるが、束縛の多い藩立学校では事めんどうなり。すべて自由なる私立学校ならば予もまた大いに尽力すべし」とのことと、この英語学校を私立の共立学舎として開設の準備を進めた。

英語の教師の招へいのため梧陵のとつた計画は、まことに壮大である。当時、江戸における英語学校の泰斗として何人も認めていた福沢諭吉を招こうと計画した兩人は、手紙を送って交渉したが謝絶され、やむをえず英國人サンドルスを月俸三百円で、通訳として山内提雲（のち鹿児島県知事となる）を月給百円でやとい、必要書籍の購入等に三千円をあてた。この交渉の過程で福沢諭吉の兩人にあてた手紙はまことに興味のあるものである。

福沢諭吉から松山棟庵に

「……さてこのたび、御内談の学校一条、浜口氏御談御企業候趣、まことに御盛美事人間の急務これに過ぎるものなかるべし。小生もひそかに欣喜に不堪候。僕敢て貴國へ対しゴマをスルにあらざれども、これまで諸國の人々交るに、人気の穂にして自ら自由寛大の風を存し候は、紀人に限り候様有之候。唯次点は文教薄うして頼む所なき故、他の真似事に志し、たとえば訓練をすれば直ちに筒袖だん袋、公議附合すれば直ちにジャンギリ、飲むものは洋酒、嘗るものはボートル、今一等を下れば乱暴無禮書生の真似をいたし、高下駄、長大小湯屋にて詩を吟じ、茶屋にては女をからかふ様、本来の天稟になき所業を懲と勉めて真似するの風なり。この様子を以て考るるに、人殺の仲間に入らば人殺の真似をも可致、この悪徳はひとり紀州に限らず、天下皆然り。然りといえども紀州人はその甚しきものかと愚察仕候。」……とまことに辛らつである。さらに続いて……「第一、民人のTaste未だ文化の域をうかがひたることなし。道具仕掛の学問所を設くるも、ただ珍らしく思ひ仰天するのみにて、俄に学ぶものなかるべし。第二、英書を読むは甚だ六ヶ敷き事業、支那日本の文学すら十分に読めざる人に、俄に横文を教わるは無理の事に候。第三、先生を雇うこと難し。當時金ヅクならば窮理書を一冊読候野郎にても、政府の学校に出でれば月給三十両五十両も取り申候。」……右の次第甚だ難事に有之候へ共、其事行わざるにあらず。愚案にてとかく事を易く小さくいたし度、先づ国人文化の風に導くには、必ずしも横文に限り申間敷、先づ國中の手習師匠に手当差遣し、読

書手習兼帝の先生といだし、論語の代に知環啓蒙を読み、庭訓往来の手本を廃し、窮理図解を手本の文字に認め、隨て文字を覚え、隨て義理を解する様の仕掛にいたし……」と具体的な指導方法に述べている。

福沢諭吉から浜口梧陵に

「正月二十九日の貴駕相達し拝見仕候。春暖相催し候處益々御清安被成御勤仕奉拝賀候。隨て小生義無恙消光仕り候。(乍擲御放念可被下候。爾後無申詣御無音御海容奉候。) 拓此の度は松山氏より縷々の文通、御企の一茶細拝承乍喜欣喜の至りに奉存候。就ては小生南行の義被仰下恐縮の次第に御座候。巨細の事情は松山氏へ返書差出置候間御承知被下度奉存候。何卒此度の御盛事は必ず御成功相成候様いたし度、兎角人に知識ぞしく候ては、不羈独立の何物たるを知らず、一身の独立をも知らざる者を相手に為し、何ぞ天下の独立を談ずべげんや、方今之急務先づ文明開化なりの談は姑くおき、人民知識の端を開き候義と奉存候……」

このようにして設立された共立学舎は、城下三木町の三毛屋において開校したが、のちに丸の内の士族屋敷に移り、前記の松山棟庵と山内提雲もここに住んで教育にあつた。このほか梧陵の教育面につくしたことは広く、和歌山市における自修舎(徳義中学校の前身)復興の援助もその一つである。なお、郷里広村における私費を投じての大防波堤の築造をはじめ、産業振興のためのかずかずの業績は紙面の都合で省略する。

三 学制発布の前後

寺子屋と家塾

藩士の子弟以外の者は藩学への入学を許されなかつた當時にあつては、農工商の子弟は寺子屋か家塾において勉学するほかなかつたことは紀州藩においても同様である。

記録によれば、當時本県における寺子屋は一九四、家塾は六となつてゐる。

寺子屋の教室は教師の自宅や寺院が多く、授業は早朝から午後二時ごろまでで、當時のハツに相当し、放課帰宅をハツあがりともいつた。

休日は、毎月一日、十五日、二十五日(菅公の忌日)および五節句(一月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日)と和歌祭の四月十七日とするところが多かつた。ほかに十二月二十四、五日から一月十一、二日までの大休みと、七月七、八日から十六日までの盆休みである。

寺子屋における教育内容はほとんど習字で、教師は手習師匠とも呼ばれ、読書、算術はごく一部分である。習字の手本は師匠の書いたものが多く、いろは、数字を初步とし、名字尽し、今川古状揃(女子は女今川)、商売往来、庭訓往来、千字文をはじめ和歌浦名所、紀三井寺詣で、南龍公の「父母状」、香巌公(十代藩主の治實)の「人馬を持」、徳川家康の「樂は苦の種」などの箴言が多く用いられたようである。

入門は寺入りといい、五~六歳から七~八歳が普通で、学年末

試験の大ざらいによつて進級し、修業年限は一定していなかつたが、普通五~六年で六つ折に昇給し、七~八年で無格となり卒業した。

寺子屋は、江戸時代中期以後、南工業の發展につれ、庶民の教育機関として、日常生活に必要な読み・書き・そろばんの指導を中心として多數開設されており、明治の学制発布による初等教育の基盤がすでに完成しつつあつたといふことができよう。

いっぽう、寺子屋より高等なもので、藩の儒官や篤学の処士などがその士弟や庶民を教育するため開いた家塾には、世界ではじめて全身麻酔による手術に成功した華岡青洲(隨賢は通称)の華岡隨賢家塾、有田郡栖原村(前述)の敬業家塾、和歌山市における修敬社と篤信社、田辺市の有終塾などがある。なかでも華岡青洲は、那賀郡西野山村平山に生まれ、二十三歳で京都に留学し、一八〇五年(文化二年)に麻酔薬通仙散(麻沸散)による全身麻酔によつて乳癌の手術に成功した。その後名聲天下にひびき、「医生の藝に入つて学ぶもの千百三十人、六十余州のうち至らざるは大隅、壱岐の二國の人のみ……」といわれたが詳細は省略する。

始成小学校の開校

明治二年の全國にさきがけた画期的な紀州藩政大改革、版籍奉還、明治四年の廢藩置県と次々と打出されるあわただしい改革の中で、旧藩主徳川茂承は知藩事を免ぜられ、東京に在住するため、九月二十四日和歌山を去つた。十一月二十一日、府県の改廢によって、和歌山、田辺、新宮の三県は統合されて、ここにはじめて

新しい和歌山県が誕生した。兄の大参事津田出が藩政改革の功にあって、中央政府に召されたあとをついで、旧和歌山県の大参事心得となっていた津田正臣は和歌山県の権令（事实上の和歌山県初代知事）となり、浜口梧陵が参事となって補佐することになった。

ついで、十二月二十七日の太政官達「県治条例」により初期の県の行政体制がほぼかたまり、新政府もはじめて全国的に統一した行政を展開する基礎をつくることができたのである。

中央では、明治四年七月、文部省を設置し、翌明治五年八月に「学制」を発布したが、あけて明治六年一月四日、当時の和歌山市における最初の小学校として、始成小学校が創立された。

始成小学校は、和歌山市本町五丁目の旧藩時代の通貨を扱う茶屋（封所）において開校された。初代校長牧村桓一郎（顕彰碑は秋葉山にある）は学識深く人格高潔の士であったといわれるが、その他の教員数名はつまびらかではない。児童数は男八七名、女一二名、年齢は不同で六～七歳から二十一～三十歳の者もあり、したがって一学級は十名程度の編成であったようである。

科目は一定でないが、数学（洋算）、読書、究理（物理）等で、教科書は世界づくし、西洋事情、日本国づくし、天変地異、与地誌略、機械觀覽などが使われた。

当時の試験制度は、小学試験、卒業試験、大試験、臨時試験の四種があった。明治十二年六月十六日、和歌山県令神山郡廉の小学試験法についての通達は、「各校において試験を受けんとするときば、遅くとも一週間前、郡区役所区取締、町戸長、駐在訓

導および幹事等へ通報すべし、卒業試験、大試験、臨時試験の点表は、各三通を製し、一は学区取締をへて県庁学務課に進達し、一は校内に掲示し、一は本校に保存すべし。」として試験の内容、採点方法等まことに嚴重な規定をしている。

尋常小学校は小学校則により、下等小学四年、上等小学四年を各八級（各年二級）にわけている。

明治六年の本県の統計によると、小学校は二〇四校、うち四一校は正則の尋常小学校、一六三校は村落小学（寺子屋）によって開校しているものを小学外舎とし、村落小学校という）であった。明治八年には公立小学校三二一、私立中学校一、私立小学校および家塾が四〇となつた。学制発布により、県学のあとにできた岡山小学校に開設した岡山小学教員取立学校を師範学校と改称して教員養成の強化をはかつた。しかしながら、児童の修業年限、経費の負担等問題は山積していたが、教育会議などを開催して小学区の改正を実施するなど、ようやく本県の教育事務も軌道にのりはじめたのである。

参考資料 和歌山県誌、和歌山県政史、和歌山市史要、浜口梧陵伝（浜口梧陵銅像建設委員会）、本町校と本町区（和歌山市立本町小学校）

（和歌山県教育委員会総括指導主事）